中国の世界遺産

北京-頤和園

中国概況

中国とは中華人民共和国の略称です。

位置・領域

中国はアジア大陸の東部、太平洋西岸に位置しており、領域は広く、物産は豊かです。陸地面積は約960万km²、大陸部の海岸線は1万8千km以上あります。大きい島は台湾島と海南島です。

地形・河川

中国の地勢は西が高く東が低い階段状になっています。そのため多くの大きな川が西から東へ流れます。中国河川の総延長は22万kmに及び、その内長江と黄河は世界でも有名な大川です。

中国領内には、延々とつづく山々があり、雄大な高原と果てしなく広がる平野があり、群山に囲まれた盆地やなだらかに起伏する丘陵などがあります。山地、丘陵、高原は全国陸地総面積の約7割を占め、2000余りの大小さまざまな天然の湖沼は中国大地にはめ込まれた真珠のようです。世界の屋根といわれている青海・チベット高原は平均海抜4000m以上で、一番高い山は海抜8848mのチョモランマ峰で世界一です。一番低いところは新疆トルファン盆地で海抜マイナス155m以下です。

気候

中国は大陸性モンスーン気候に属し、四季があります。しかし、領土は南北緯度約50度にまたがるため、気候は多様です。熱帯、亜熱帯、温帯がありますが、亜寒帯もあります。一番北の黒龍江省は冬が長く夏は短いです。南の海南島には冬がありません。淮河流域は四季がはっきりしていて気候は穏やかです。青海・チベット高原は年間を通じて気温が低いです。西の砂漠地帯は年中雨が少なく乾燥しています。

資源

中国は天然資源が豊富で、多くの鉱産物埋蔵量は世界の上位にランクされています。中国は野生動植物の多い国で、世界でも珍しいものとしてはパンダ、朱鷺、高山青ケシ、金花茶などがあげられます。

歴史

5000年以上の文明史をもっている中国は世界文明古国の一つで、長い原始社会を経て、ほぼ紀元前21世紀の夏時代から奴隷社会に入り、続いて商、西周、東周(春秋戦国)などの時代が現われました。

紀元前221年、秦の始皇帝は中国史上最初の中央集権性の統一的封建国家——秦を樹立しました。その後、漢、唐、宋、元、明、清の各時代を経て、1840年のアヘン戦争まで中国はずっと封建社会にとどまっていました。

中国は高度な古代文明をつくり出しました。早くも3000年前の商代はすでに青銅器の鋳造技術を持ち、鉄器を使用し始めました。長い歳月の中に、数多くの優れた思想家、科学者、芸術家、文学者が現われ、製紙術、印刷術、羅針盤、火薬の中国古代四大発明が生まれました。数学、医薬学、天文学、農学、建築などの分野でも当時の世界におおきな影響を与えました。

1911年、孫文が指導する辛亥革命は清王朝を倒し、中国で3000年以上続いていた君主制度を終わらせ、中華民国臨時政府を樹立しました。

1949年10月1日に、社会主義制度の中華人民共和国が成立しました。その後、香港,マカオの中国復帰に伴い、今の中国は一つの国に社会主義と資本主義が両立する二つの社会制度を維持しています。

人口・民族

今、中国は世界で最も人口の多い国で、総人口が13億を超え、世界人口の約22%を占めています。中国は多民族国家で、56の民族が住んでおり、人口の9割は漢族です。中国の法律において各民族は人口の多少を問わず、一律平等です。56の民族はそれぞれアチャン族(阿昌)、イ族(彝)、ウイグル族(維吾尔)、ウズベク族(烏孜別克)、エヴェンキ族(鄂温克)、オロチョン族(鄂倫春)、回族、カオシャン族(高山)、カザフ族(哈萨克)、漢族、キルギス族(柯尔克孜)、コーラオ族(仫佬)、サラ族(撒拉)、ジーヌオ族(基諾)、シェ族(畲)、シボ族(錫伯)、シュイ族(水)、ジンポー族(景頗)、ジン族(京)、タイ族(傣)、タジク族(塔吉克)、タタール族(塔塔尔)、ダフール族(达斡尔)、チベット族(藏)、チャン族(羌)、朝鮮族、チワン族(壮)、トウチャ族(土家)、トウ族(土)、トーアン族(德昂)、トールン族(独龍)、トンシャン族(東鄉)、トン族(侗)、ナシ族(納西)、ヌー族(怒)、パオアン族(保安)、ハニ族(哈尼)、プイ族(布依)、ブーラン族(布)、プミ族(普米)、ペー族(白)、ホジェン族(赫哲)、マオナン族(毛南)、満族、ミャオ族(苗)、メンパ族(門巴)、モンゴル族(蒙古)、モーラオ族(仫佬)、ヤオ族(瑶)、ユイグー族(裕古)、ラフ族(拉怙)、リス族(傈僳)、リー族(黎)、ローバ族(珞)、ロシア族(俄羅斯)、ワー族(佤)です。

行政区画

現在の中国行政区域は省、地区、県、郷の四クラスに分けています。省クラスは省、自治区、直轄市、特別行政区、地区クラスは地区クラスの市、地区、自治州、盟、県クラスは市管轄の区、県クラスの市、県、自治県、旗、自治旗、特別区、林区、郷クラスは鎮、郷、民族郷、街道に分かれています。目下、中国には合わせて23の省、5つの自治区、4つの直轄市に2つの特別行政区があります。23の省はそれぞれ河北、山西、遼寧、吉林、黒龍江、江蘇、浙江、安徽、福建、江西、山東、河南、湖北、湖南、広東、海南、四川、貴州、雲南、陝西、甘粛、青海、台湾で、5つの自治区はそれぞれ内モンゴル自治区、広西チワン族自治区、チベット自治区、寧夏回族自治区、新疆ウイグル自治区で、4つの直轄市はそれぞれ北京、天津、上海、重慶で、2つの特別行政区は香港とマカオです。

首都

北京は中華人民共和国の首都であり、政治、経済、文化の中心でもあります。古都の風情を保っている現代的な国際大都市です。

言語・文字

漢語は現在中国の公用語で、国連に使用されている6種類の公用語のひとつのです。ほかに、55の少数民族には民族言語があります。

目　次

中国概況 …… 表紙2

文化遺産

北京と瀋陽の明・清王朝皇宮 …… 02
万里の長城 …… 03
敦煌莫高窟 …… 04
秦の始皇帝陵と兵馬俑坑 …… 05
周口店の北京原人遺跡 …… 06
曲阜の孔廟、孔林、孔府 …… 07
承徳避暑山荘と外八廟 …… 08
武当山の古代建築群 …… 09
ポタラ宮、大昭寺(ジョカン寺)、羅布林卡(ノルブリンカ)… 10
廬山国家公園 …… 11
平遥古城 …… 12
麗江古城 …… 13
蘇州の古典庭園 …… 14
天壇 …… 15
頤和園 …… 16
大足石刻 …… 17
青城山と都江堰 …… 18
龍門石窟 …… 19
安徽省南部の古村落：西遥、宏村 …… 20
明・清王朝の皇帝陵墓群 …… 21
雲崗石窟 …… 22
高句麗王城、王陵及び貴族の古墳 …… 23
マカオ(澳門)旧市街 …… 24
殷墟 …… 25
開平の望楼と村落 …… 26
福建土楼 …… 27
五台山 …… 28
「天地の中」歴史建築群 …… 29
杭州西湖の文化的景観 …… 30
元時代上都の遺跡/紅河ハニ棚田 …… 31

自然遺産

九寨溝 …… 32
黄龍 …… 33
武陵源 …… 34
三江併流 …… 35
四川省のパンダ生息地 …… 36
中国南方カルスト …… 37
三清山 …… 38
中国丹霞 …… 39
新疆天山/澄江の化石出土地域 …… 40

複合遺産

泰山 …… 41
黄山 …… 42
峨眉山と楽山大仏 …… 43
武夷山 …… 44

無形文化遺産

昆曲 …… 表紙3
古琴 …… 表紙3
ムカム …… 表紙3

北京と瀋陽の明·清王朝皇宮 ぺきんとしんようのみん·しんおうちょうこうきゅう

【世界遺産委員会の評価】　（北京故宮は1987年12月11日、瀋陽故宮は2004年7月1日世界遺産に登録された。）

紫禁城は中国近代500年以来の最高権力の中心であり、庭園景観と家具や工芸品を収めた9000室の部屋がある巨大な建築群で、明·清時代における中国文明の非常に貴重な歴史の証拠となっている。

北京故宮、または紫禁城と呼ばれる。明朝の永楽4年（1406年）に造られて、永楽18年（1420年）に完成した。かつて24人の皇帝がここで即位して政権を握った。総面積は78万㎡、世界に現存する規模最大で保存状態もとても良い古代の木造建築群である。

城の主体は長方形を呈して、各方向に向いてそれぞれ一つ門をもつ。主体の建物は真ん中に沿って東西に展開し、南は王朝で皇帝に謁見する所、主体の建物は太和、中和、保和三つの正殿となっている。そのうち、太和殿は宮殿の中で最も重要で、最も象徴性が高い正殿であり、中国でランクが最も高い古建築で、皇帝の即位、婚礼などはすべてここで行われた。北は皇帝と皇后と妃や女官が居住し、祭祀と宗教活動および日常の事務を行う場所で、主に乾清、交泰、坤寧の三宮などがある。これらの建物の多くは赤い壁、黄色の瓦で、きらびやかに輝き、中国古代の封建的な礼式を現している。城壁の四隅はそれぞれ一基の隅櫓が建てられ、見張りや警戒に使われた。城の周りに10mの高い城壁と52mの広い堀がある。

瀋陽故宮は遼寧省瀋陽市に位置し、わずかに残る中国少数民族の地方政権の宮殿であり、さまざまな古建築が114軒ほど現存している。瀋陽故宮は満族が漢、蒙古、チベットなどの民族建築技術と芸術を、満族の社会制度、生活様式、審美観に融合して造られたものである。

■アクセス

北京地下鉄1号線、あるいは路線バス1、2、4、10、20、120、802番で天安門、また101、103、109、111、810、812、814、846番で景山前街で降り、北京故宮に行くことができる。

瀋陽故宮までは遼寧省瀋陽市内213、222番の路線バス、あるいは環状電車に乗って到着することができる。

万里の長城 ばんりのちょうじょう

【世界遺産委員会の評価】　（1987年12月11日世界遺産に登録された）

紀元前220年、天下を統一した秦始皇（紀元前259－前210年）は、より早い時期に継続的に造られた軍事的防御施設を一つに繋げて、整備された防御システムを造り、それによって北方からの侵略に抵抗した。明代、（1368－1644年）にまた引き続き建設され、長城は世界で最も長い軍事施設となった。長城の文化芸術の価値は、その歴史と戦略上の重要性にある。

東の遼寧鴨緑江畔から、西の甘粛嘉峪関まで、戦国時期(紀元前480－前221年)から造られ始め、清代(1616－1911年)に長城の工事はやっと大部分を終えた。長城は河北、北京、内蒙古、山西、陝西、寧夏、甘粛などにわたっており、全長は約8851kmあり、世界で最も長い防御施設である。防御以外にも、歴史上、通信と行商人の往来保護において重大な役割を果たした。

くねくねと曲折し、勢いよく続く長城は、土、れんが、石を主な建築材料として造られ、万里の城壁の上に分布している百基の堅固な関所と数多くの烽火台は、上り下りの地形を更に高く険しく勇しく見せるの防御工事の主体の部分で、主に地形と防御機能の需要に基づき、山と平原の険阻な場所に造られた。烽火台はこの防御工事の中で最も重要な構成部分の一つで、大部分が高い山に建設され、主に軍事情報を伝えることに用いられた。伝達方法としては、昼間は煙をあげ、夜間は火を灯した。堅固な関所は長城沿線の重要な駐屯拠点であったため、重要で堅固な関所で築城し、防衛を配置し、そして密閉性のある砦と城壁が繋がって関所を形成していた。関所は万里長城の防御線で最も集中する防御の拠点であった。

山海関、八達嶺、慕田峪、嘉峪関などは、長城の重要な区間である。そのうち、八達嶺は明代の長城の最も優れた代表的なもので、要塞に位置するため、道が四方八方に通じていてその名がつけられた。司馬台長城は「驚、険、奇」で有名である。嘉峪関長城は「天下の険しい関所」と称され、現存する長城の中で最も完備している堅固な関所である…中国は古来より「長城に登らざるは好漢に非ず」という言葉があり、長城は中華民族の精神力のシンボルになっている。

■アクセス

最も有名な八達嶺長城は北京の北西50kmにあり、北京市内から路線バスで行くことができる。

北京の東約300kmの山海関長城は河北省秦皇島市の近郊に位置し、秦皇島空港からバスで山海関長城に行くことができる。

嘉峪関長城は嘉峪関市の南西6kmに位置し、嘉峪関空港からバスで嘉峪関長城に行くことができる。

敦煌莫高窟　とんこうばっこうくつ

【世界遺産委員会の評価】　（1987年12月11日世界遺産に登録された）

敦煌莫高窟は、古代シルクロードの交通の要所に位置したころから、東西の貿易の中継地であり、また宗教、文化および知識が融合しあう合流地でもあった。莫高窟には大小492の石窟があり、彩色塑像と壁画で世界的によく知られている。それらは千年にわたって続いた仏教芸術を示すものである。

莫高窟は「千仏洞」とも呼ばれていた。莫高窟は甘粛省敦煌市から東南へ25km離れた鳴沙山の東麓の絶壁上にあり、開削は前秦の建元二年（366年）から始まり、元の時代に定型化し、現在、735の石窟（そのうち、492の石窟は塑像と壁画で世界によく知られている）がある。壁画は4.5万㎡あり、泥質の彩色塑像は2415体、世界で現存する最大規模で、内容も最も豊富な仏教芸術の聖地である。

莫高窟の石窟は南北両区に分かれている。北区で発見された石窟は僧侶たちの生活、修行、死後における埋葬の場所である。南区は莫高窟の中心仏壇窟などがある。石窟の大きさは異なり、最大は268㎡、最小が1㎡未満である。

壁画は洞穴の四壁、窟頂と仏龕に描かれており、内容は豊かで、宗教及び世俗生活を表現している。2mの高さにして並べると25kmの長さに及ぶ。「世界画廊」の美しい愛称がある。飛び交う飛天（仏教における空中を舞う天女）が敦煌芸術のシンボルとなっている。

莫高窟の塑像は多種多様で、形も豊富で、「イメージの歴史博物館」と賞賛されている。塑像はほとんどが仏教の神仏で、単体像、群像により配列され、群像の場合、仏を中央にして弟子、菩薩が両側に立つのが一般的で、少ないもので3基、多いものは11基に及ぶ。塑像の様式は主に円塑、浮塑、影塑などがある。

莫高窟のシンボルとなっている建築は9階建ての楼閣である。それは9階構造の天井とも言うべきもので、断崖と同じである。楼閣の中にある高さ35.6mの弥勒大仏坐像は土を盛り上げた形を整えた石胎塑像で中国三番目の仏坐像である。

専門的研究、発掘、整理及び敦煌文物、文献の保護に関する総合的学科——敦煌学は国際的に注目される分野となっている。

■アクセス

敦煌市から12.7km 離れた敦煌空港は、中国の主要都市と国内線で結ばれている。敦煌市内から路線バスで莫高窟に行くことができる。

秦の始皇帝陵と兵馬俑坑　しんのしこうていりょうとへいばようこう

【世界遺産委員会の評価】　（1987年12月11日世界遺産に登録された）

1974年に発見されていなければ、この遺跡における千点を数える陶俑は今なお地下に眠っていたであろう。

構造の複雑な秦の始皇帝陵は始皇帝生前の都——咸陽の都市設計を模したものである。陶俑の形態はさまざまで、戦馬、戦車、武器もすべて写実性にすぐれた傑作であり、同時に極めて高い歴史価値がある。

始皇帝陵は陝西省西安市臨潼区東5kmの驪山の北麓にあり、中国歴史上最初の皇帝陵墓である。紀元前246年に創建、38年間かけて完成された。面積56.25㎢のこの陵墓は史上最大規模である。

始皇帝（紀元前256－前210年）は中国史上初の全国統一、多民族、中央集権制の封建王朝——秦王朝を樹立した。その陵墓は都の咸陽の都市設計を模し、おおむね「回」字形を呈する。封土を中心とし、地下宮城、内城、外城及び外城外などの異なる区域に分かれる。始皇帝が住んだ宮廷に対応し、宮城と内城の間に寝殿、馬車儀仗隊を含む祭祀、副葬の建築がある。内城壁と外城壁の間では馬厩坑、園寺吏舎などの建築の遺跡が発見された。周囲には兵馬俑などの陪葬墓がある。ここから出土した重要な歴史文物は5万点以上に達する。陵墓の核となる地下宮殿は、盛土の部分の下にあり、始皇帝の棺桶が安置されるところである。

陵園の東側1500mに位置する兵馬俑坑は秦の始皇帝陵の陪葬墓である。発掘された兵馬俑坑は3つあり、坑内には陶俑陶馬8000点、4万余点の青銅器がある。3つの兵馬俑坑は西側にあって東を臨み、「品」字形に並んでいる。1974年に発掘された1号坑の東西の長さは230m、南北の幅は62m、深さは約5mある。坑全体は長廊と11の貫通した洞で構成され、6000余りの武士俑、戦車を引く陶馬は成人と等身大のものである。その表情は真に迫り、形態はさまざまで、坑内に整然と並んでいる。3号坑は統帥部とされている。

■アクセス

西安駅前広場からは306番バスが風景区に直行する。自動車の場合は西潼高速道路で臨潼区に到着し、さらに3km進めば、始皇帝陵が見える。それからさらに4km前進すると、兵馬俑博物館に到着する。

周口店の北京原人遺跡　しゅうこうてんのぺきんげんじんいせき

【世界遺産委員会の評価】　(1987年12月11日世界遺産に登録された)

北京の南西42kmにある、房山区周口店村の西の龍骨山で、遺跡の科学考察作業は依然として行われている。周口店遺跡は古代アジア大陸の人類社会の貴重な歴史的証拠であるだけではなく、類人猿から現代人への進化過程をも反映した。

周口店の北京原人遺跡は、北京市の中心部から南西に約50kmの房山区周口店村龍骨山に位置する。周口店遺跡の面積は2.4km²で、1929年に比較的整った北京原人の化石が出土されたことで有名になった。資料が豊富で、系統的で、最も価値がある旧石器時代(約250万年－1万年前)初期の人類の遺跡である。

スウェーデンの地質学者 ユハン・アンデショーン(1874年7月3日－1960年10月29日)がここで人類のものと思われる歯の化石を発見した。さらに、その後の調査で1929年12月2日、中国の考古学者裴文中が完全な頭蓋骨を発見し、現在に至るまでに、6個のほぼ完全な頭蓋骨化石を含む体の各部分の骨の化石が約40体分も発見されている。この他にも1万点を超える石器や石片が出土しており、これらは今から約50万年－20万年前のものと推測されている。また、この人種は火を使用して、食料を焼く行為や暖をとる行為を行っていた跡も発見された。これらの出土品からこの人種が道具を使い、狩猟と採集をして生活していたことが判断できるとともに、猿人と現生人類の進化過程の中間に位置する人類であることも分かった。北京原人の発見は人類の進化だけでなく、生物学や考古学的な観点でも非常に貴重なものであった。また、1933年には龍骨山の頂上付近の洞窟で1万8000年前のほぼ現生人類と変わらない「山頂洞人」と呼ばれる人種の化石が発見され、1973年には龍骨山北東の山腹で10万年前の「山頂洞人」と「北京原人」の中間ぐらいの進化を遂げた新たな人種の化石も発見されていて、まさに人類の進化の縮図がここ周口店にあるといえる。これらの化石は人類初期の生物学の進化と初期文化の発展を研究するための実物の根拠として提供され、ホモ・エレクトゥスの進化の段階を確立し、そのため、ホモ・エレクトゥスは猿なのか人なのかという論争は、終止符を打つこととなった。周口店の北京原人遺跡は、その名に恥じない人類の太古文化の宝庫と言える。

■アクセス

北京市の西路線バスターミナルからは、616番のバスに乗って良郷西門で環状線2番のバスに乗り換え、周口店北京人遺跡へ到着することができる。

曲阜の孔廟、孔林、孔府　きょくふのこうびょう、こうりん、こうふ

【世界遺産委員会の評価】　(1994年12月16日世界遺産に登録された)

孔子は紀元前6世紀から紀元前5世紀の中国春秋時代の偉大な哲学者であり、政治家、教育者である。孔子の廟、墓地、邸宅は山東省の曲阜にある。曲阜の旧建築群が独特の芸術や歴史的な特色を備えている原因は、2千年以上に亘って中国の歴代皇帝が孔子を崇拝し、その建築群を修繕して保護してきたのである。

山東省曲阜市に位置し、孔子(紀元前551－前479年)とその末裔を祀った廟である孔子廟、墓地である孔林、邸宅である孔府を合わせて「三孔」と呼ばれ、それらは約千個の建築物を有する巨大な建築群である。

孔子は中国古代の偉大な思想家、政治家、教育者であり、世界的に有名な文化人でもある。孔子が樹立した儒学は、東洋の文化圏や欧州の啓蒙運動に多大な影響を与えた。

「衍聖公府」とも呼ばれる孔府は、孔子の直系が暮らしていた住宅である。宋金時代(960－1234年)に建造され、明朝の洪武10年(1377年)に現在の場所に移された。孔府は封建社会の貴族型荘園の典型であり、480以上の建築物を有し、中国では明(1368－1644年)、清(1616－1911年)の皇帝の宮殿に次ぐ規模である。孔府には6万点以上の明・清時代の文書が収蔵されている。この数は中国最多で、最も古い研究資料であり、まさに巨大な宝蔵と言うにふさわしい。

曲阜城の中央に位置する孔子廟には孔子が祀られている。アジアにはかつて2千以上の孔子廟があったが、その中で最も古く、規模も最大で、典型的な形式を有する。孔子廟は孔子の旧宅を改築したもので、中国特色のスタイルを有し、荘厳な雰囲気を持つ建築物である。百以上の建築物に460以上の部屋が現存しており、中でも正殿である大正殿には、孔子の神像が祀られている。孔子廟には歴代(紀元前149－1949年)の碑文を記した石板などが1044個現存しており、封建社会の政治、経済、文化、芸術を研究する上で、貴重な史料である。また、孔子廟には、石で作られた芸術品も多数残されている。中でも、漢(紀元前206－220年)の画像石、明・清(1368－1911年)の雕鐫石柱、明(1368－1644年)の刻聖跡図などが有名だ。

「至聖林」とも呼ばれる孔林は、曲阜城から北に1kmに位置し、孔子とその後裔が眠る墓地である。これまでに2500年以上にわたり使用されてきており、孔子一族の墓は10万以上にのぼる。ひとつの家系が葬られた墓地としては、世界で最も歴史が長く、規模も最大である。孔林の面積は約2km²で、中心に孔子の墓地がある。墓道は約1266mもあり、周囲は高い木々で覆われ、自然の植物園のようである。

■アクセス

曲阜には京滬鉄道や国道327号、104号が通っている。孔府や孔子廟は長距離バスターミナルから50m付近に位置し、アクセスは便利である。孔林は孔府の裏門から1300mの場所にあり、タクシーが利用できる。

承徳避暑山荘と外八廟 しょうとくひしょさんそうとがいはちびょう

【世界遺産委員会の評価】 (1994年12月16日世界遺産に登録された)

承徳避暑山荘は、清王朝(1616－1911年)の夏の離宮であった。河北省に位置し、1703年に着工され、1792年に竣工した。多くの宮殿や政務、儀式を執り行う建築物からなる巨大な建築群である。建築様式の異なる廟や皇室の庭園が、周囲の湖や牧場、森林に見事に溶け込んでいる。避暑山荘は、その美しさに対する研究価値だけでなく、中国の封建社会の末期の姿を残す、数少ない史跡でもある。

河北省承徳市の中心より北へ、燕山山脈の奥深くに位置する。1703年に着工し、清朝(1616－1911年)の皇帝が夏の離宮として用いた。皇帝の宮殿、皇室の庭園、雄大で壮観な寺廟群からなり、中国に現存する最大規模の古代皇帝御苑と皇帝の寺廟群である。

避暑山荘は皇帝が避暑地として政務を行う場所であり、面積5.64㎢を有し、宮殿エリアと庭園エリアに大きく分けられる。宮殿エリアは本宮、松鶴済、万壑松風、東宮からなる。建築スタイルは、素朴ながら品位があり、皇室の雰囲気を失っていない。庭園エリアは、湖エリア、平原エリア、山エリアに分かれ、その見どころはほとんどが湖エリアにある。湖エリアには、大きさの異なる湖が8つある。湖は山に囲まれ、湖には島が浮かんでいる。建築物は島や中州、岸に彩を添え、江南地方の郷土色に溢れている。平原エリアは西側の草原と東側の森林「万樹園」に分かれる。万樹園の西側にある文津閣は、中国の四庫全書が収録されている場所の1つである。山エリアは棒子谷、梨樹谷、松雲峡からなり、天を突く勢いの松など、木々が生茂っている。

避暑山荘は周囲の約半分が煌びやかな寺院に囲まれており、その総面積は47.2万㎡に達する。かつては11ヵ所の寺院があり、そのうち8ヵ所が清朝政府の理藩院によって管理され、いずれも古北口の外に位置しているため、「外八廟」と呼ばれた。外八廟の建築様式は大きく漢式、チベット式、漢・チベット混合式に分けられる。壮大な規模と精巧な造りを誇っており、保存状態の良い美しい仏像や法器が百万個近く祭られ、チベット仏教の聖地のひとつとなっている。

■アクセス

承徳へは、直通列車と長距離バスがある。また、京承高速道路、泰承道路も通じている。

承徳駅から観光スポットへは、5番、7番、11番、15番の路線バスを利用して行くことができる。

武当山の古代建築物群 ぶとうざんのこだいけんちくぐん

【世界遺産委員会の評価】 (1994年12月16日世界遺産に登録された)

武当山古建築のうち、宮闕廟は元(1206－1368年)、明(1368－1644年)、清(1644－1912年)の三王朝の民間建築と宗教建築の知識と技術を集結して造られた。古建築群は湖北省武当の山麓にあり、明の時代に規模が拡大された。その中の道教建築は7世紀まで時代を遡ることができる。これらの建築には、約千年にわたる中国芸術や建築の真髄が現れている。

湖北省北西部の十堰市に位置し、総面積312㎢を占める。72の山、36の岩、24の谷、11の石窟、10の池、9の高台などからなる名勝は、道教の聖地として有名である。

武当山古建築は壮大で力強く、宮観(道教の社)を中心として、庵堂神祠が四方を取り囲んでいる。これは皇族の宗教建築の典型と言える。

記録によると、唐朝(618－907年)から清代(1616－1911年)の間に、500ヵ所以上の廟が建築されている。明王朝(1368－1644年)は、武当山の道教が最も繁栄した時期で、明の歴史の皇帝も武当山の寺院を皇室一族の廟として改築した。明の永楽年間(1403－1424年)には、12年の歳月をかけて、9宮9観、36の尼寺、72の岩廟など総面積160万㎡にわたる道教の建築物群を建立した。また、明の嘉靖31年(1552年)には、全面的な改築が行われており、武当山に現存している建築も多くが明代に建てられている。

紫霄宮は北宋(960－1127年)に建築が始められ、その後の王朝でも拡張が行われたが、特に明の永楽年間で盛んに拡張された。武当山では、最大規模で保存状態も最良の道教建築である。龍虎殿、十方堂、紫霄殿など計29個の建築物が現存しているが、その中心である紫霄殿は紫武当山を代表する木造建築である。

玉虚宮は武当山古建築群の中で最大規模の廟である。明の永楽11年(1413年)に建築が始められ、東、中央、西の三院に正殿、祠、御堂、廟、祭壇、楼閣など2200以上の建築物があったが、清の乾隆10年(1745年)に、そのほとんどが火災で焼失した。内羅城と紫禁城が現存しており、紫禁城には明代の石碑が4つ残されている。

古建築のほかにも、武当山には7400点以上の貴重な文物が残されている。特に、道教の文物が有名であるため、「道教の文物倉庫」と呼ばれている。

また、武当の道教からは、「内気拳」とも呼ばれる武術が生まれた。長い歴史を有する中国武術の一大流派であるとともに、健康法としても優れている。

■アクセス

北京、石家荘、鄭州、上海、武漢、重慶、成都、青島、襄樊などの都市から武当山への最寄り駅十堰駅までは毎日列車が運行している。

武昌～十堰間は、「武当」号という観光列車が運行している。武当山の麓には武渝鉄道が通っており、武漢からは鉄道を利用して武当山駅で下車すれば、武当山の入り口にあたる玉虚宮が目の前に見える。

ポタラ宮、大昭寺(ジョカン寺)、羅布林卡(ノルブリンカ)

【世界遺産委員会の評価】　(ポタラ宮は1994年12月16日、大昭寺は2000年11月30日、羅布林卡は2001年12月1日世界遺産に登録された)

チベット仏教と歴代行政統治中心のポタラ宮は、華麗な装飾と天然の美観を調和することで、チベットの民族特色をよりいっそう引き立たせている。大昭寺は漢族とチベット族を融合するの代表的な建築群である。18世紀に創建された羅布林卡はダライ・ラマの夏の宮殿であり、宗教芸術の傑作でもある。

チベット自治区ラサ市西北の標高3700余mの紅山にあるポタラ宮は7世紀のチベット王・ソンツェン・ガムポ(617－650年)時代に創建された。敷地面積41万㎡、建築面積13万㎡、13階建て、高さ117mで、チベット自治区では現存の規模最大、最も完全な古代チベット族の宮殿式建築群である。ポタラ宮は歴代ダライ・ラマの冬の宮殿で、白宮と紅宮で構成されている。白宮は白壁からその名がつけられた。主殿である東大殿は歴代ダライ・ラマが座床式典(チベット族のパンチェンの継位式典)など重要な祝典を行う場所である。白宮の最上層は拝謁殿、応接室、寝室を含むダライ・ラマの寝宮である。ポタラ宮の中心部にある紅宮は赤壁で知られ、歴代ダライ・ラマの霊塔(ミイラや遺骨を祀り、納める仏塔)などを安置する。霊塔は8つあり、そのうち、5世ダライ・ラマの霊塔が最初のものであり、最も大きいものである。紅宮内の最高宮殿である薩松郎傑の中に清の乾隆皇帝(1736－1796年)の画像と「万歳」の位碑が祀られている。ほかにポタラ宮にはチベット特有のタンカおよび歴代の文物が収蔵されている。大殿内の壁画もポタラ宮内の見どころである。

ラサ市東南部にある大昭寺(ジョカン寺)は唐・貞観21年(601年)建立した。チベット自治区最古の唐を模した漢族とチベット族のスタイルを結合した木建造の建築である。主体建築の経堂大殿は高さ4階で、1階には釈迦牟尼金像、2階にはソンツェン・ガムポや文成公主などの塑像が祀られており、3階は中庭で、4階の真中は4つの金頂である。寺内には数多くの貴重な文化財が保存されている。

ポタラ宮から西側に約2km離れたラサ河畔にある羅布林卡(ノルブリンカ)は西暦18世紀中盤に造営され、歴代ダライ・ラマが政務をつかさどり、宗教活動を行う夏の宮殿である。桑頗章、金色頗章、達旦明久頗章を一体化したチベット自治区最大規模、最も美しい庭園である。主要殿堂の壁に精美な壁画が描かれてある。ここには数多くの貴重な文化財や典籍が収蔵されている

■アクセス

チベットには国際・国内航空便が開通され、成都、北京、上海、重慶、西安、西寧、広州、昆明、ネパールの首都・カトマンズの間に航空便がある。青蔵鉄道で北京、上海、成都と繋がっている。空港から市内までは約2時間。ラサの国営長距離バスターミナルは民族路と金珠路の交わるところにある。長距離バスは縦横に走っており、東は八一、昌都、成都、西は日喀則(シガツェ)、江孜(ギャンツェ)、樟木、北は格爾木(ゴルムド)に至る。市内観光の場合は、タクシーが便利。

廬山国家公園　ろざんこっかこうえん

【世界遺産委員会の評価】　(1996年12月6日世界遺産に登録された)

江西省廬山は中華文明発祥の地の一つである。この一帯の仏教寺院、道教の廟観、理学思想を表す白鹿洞書院は独特な形で素晴らしい自然と融合し、美的価値また中華民族の精神と文化的生活が密接に結びついた文化的景観を生み出している。

江西省北部の九江市の南に位置する。東は鄱陽湖に接し、南は滕王閣に面しており、「断崖絶壁、雲海、瀑布」という三つの景観が有名である。同公園内では河、湖、山が一体となっており、世界的に名の知れた避暑地でもある。風景、宗教、教育、文化が集まった名山でもある。

廬山国家公園には、滝、山、植物、地質、河川、湖、文化、別荘建築など8種類の景観がある。総面積は302㎢、山岳面積は282㎢、主峰の大漢陽は標高1474mで、「春は瑞々しく、夏は青々と、秋は魅惑的で、冬は美しい」という表現は、廬山の風景を最もよく映し出している。麓にある鄱陽湖の野鳥保護区で見られる白鶴は世界の総数の95%を占め、世界一の群れを誇る。

廬山は宗教の聖地としても有名である。廬山では4世紀から宗教が盛んで、寺院、廟、道観(道教の寺院)などが多い時で500ヵ所余りに達した。東晋太元16年(391年)には、仏教の名僧、慧遠(334－416年)が廬山に東林寺を建立した。ここから、仏教の「中国化」が始まり、廬山は中国南部の仏教の中心地となった。山頂には現在でも仏教、道教、イスラム教、カトリックなどの宗教や宗派の寺院、廟、教会などがあり、5種類の宗教が共存するという珍しい現象が見られる。

白鹿洞書院は廬山の五老峰南麓の後屏山山麓にある。中国古代の四大書院の雄であり、中国近代の700年にわたる宋学の趨勢を表している。南唐昇元4年(940年)に建てられ、南唐(937－975年)の文人、李渤(773－831年)が隠居をした場所である。宋朝の理学の巨匠、朱熹(1130－1200年)もここで世を離れて学問に励んだことがある。

清代の光緒11年(1885年)から、ロシア、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、イタリアなどの中国内の牧師、商人や、中国の要人が廬山に公館や別荘を建築した。スタイルの異なる別荘が険しい山々に建てられている。中でも、美廬別荘などが有名で、保存状態も良好である。

廬山には長い文化的歴史があり、ここから中国の山水詩が多く生まれている。東晋(317－420年)の陶淵明(365－427年頃)、劉宋(420－479年)謝霊運(385－433年)以来、多くの文化人が廬山に上り、生活し、観察しながら、詩を作ってきた。

■アクセス

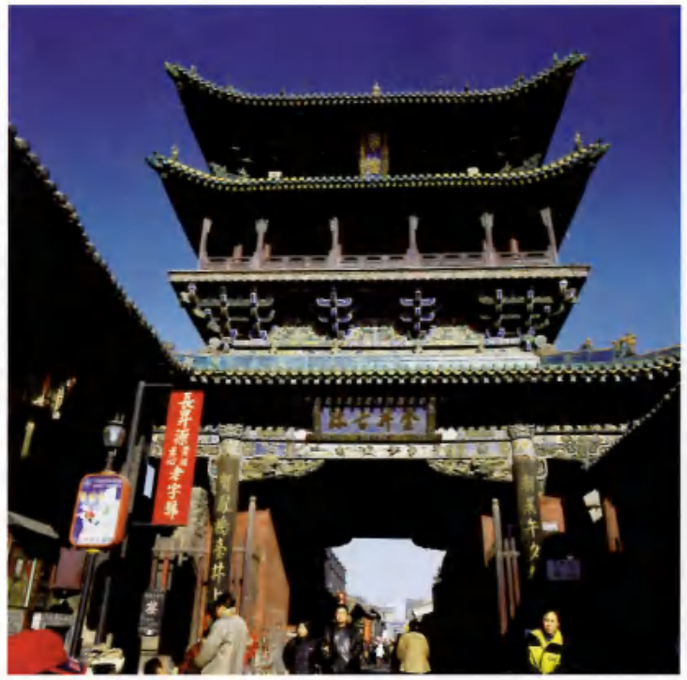
九江廬山空港は廬山の西に位置し、南昌昌北国際航空から毎日、北京、上海、深圳、アモイ、海口などの都市への航空便が発着している。

鉄道は京九線、武九線、武汕線が九江や廬山駅に乗り入れている。また、長江フェリーも毎日20便近くが九江に寄港する。

平遥古城 へいようこじょう

【世界遺産委員会の評価】 (1997年12月3日世界遺産に登録された)

平遥の古城は中国国内で保存状態の最も優れた古城であり、漢民族の都市であった明～清朝(1368-1911年)象徴である。中国史上、文化、社会、経済、宗教が非常に発展した時代を示す芸術作品である。



山西省中部に位置し、2700年余りの歴史、文化を有する古城である。総面積は2.25km²で、城壁、大通り、商店、廟、民家などにより巨大な建築群が形成されている。中国に現存する保存状態の最も優れた明—清朝(1368－1911年)の古城であり、「地上の博物館」と呼ばれている。観光客が今見られる平遥古城の城壁は明の洪武3年(1370年)に建造されたものであり、周囲の長さが6163m、壁の高さが約12mと壮大なスケールを誇り、中国で保存状態が最も良い古代の城壁である。城壁の内部には政務を司った建築物を中心に、4本の大通り、8本の裏通り、72本の路地によって、巨大な八卦の図案を形成している。南大通りを軸に、城隍廟と県庁、文廟と関帝廟、道観と寺院がそれぞれ左右対称に配置されている。政務を行った建築物は町の中心に位置する、3階建ての木造建築となっており、2階からは古城の全景を眺めることができる。これらは古城のシンボル的な建物である。平遥の民家は平遥古城の重要な構成要素であり、3900余りが現存している。現在のところ、漢民族地域で保存状態が最も良い古代の民家集落だといわれている。その多くは四合院形式が用いられ、一般的に母屋はアーチ式のレンガ造りによる洞穴式住居で、冬は暖かく夏は涼しいメリットがある。その他にも、平遥古城には数多くの文化的な観光スポットがあり、10ヵ所以上の重要文化財がある。中でも、双林寺は歴史ある仏寺で、鮮やかな彫刻芸術で有名である。寺の中の唐(618－907年)のアカシア、宋(960－1279年)の碑、明(1368－1644年)の時計、鮮やかな彫刻や古代建築は、いずれも貴重な宝物である。平遥を語るなら、山西商人(晋商)、古い金融機関や古い銀行などを見ないわけにはいかない。中国初の銀行「日昇昌」は平遥で誕生し、発行した手形が当時の中国各地で換金することができることで有名。

■アクセス

平遥古城は山西省太原市の南約100kmに位置し、路線バスで平遥古城に行くことができる。

麗江古城 れいこうこじょう

【世界遺産委員会の評価】 (1997年12月4日世界遺産に登録)

麗江古城は経済的及び戦略的な要地でありつつ険しい地勢に築かれた巧妙なバランスを取った地である。その素朴な風貌を正確かつ完全に保存し、再現している。無数の王朝の興亡に耐えた建築は歴史を積み重ね、各民族の文化的特色が溶け込んでいることがよく知られている。麗江には昔の給水システムがあり、巧妙で独特な給水システムが縦横に走り、今も活躍している。

麗江の古城は中国西南部、雲南省麗江市麗江壩中部に位置し、大研鎮とも呼ばれる。中国で最も完全に保護されている四大古城の1つであると同時に、中国の歴史的文化名城の中で唯一城壁がなく、最も民族的な特色を備えた古城である。13世紀後半に創建された麗江の古城は雲貴高原にあり、標高2400m余、面積に3.8km²に及び、現在の住居人口は2万5千人で、ナシ族が圧倒的に多い。

麗江古城はまた「高原水郷」とも呼ばれる。3本の川が市内を貫き建築物のほとんどが川沿いに建てられ、川と並行する建築の長廊が形成されている。また山を背に建てられた建物が山の起伏で重なり合って趣がある。古城全体は山、水、民家という三位一体の枠組を呈している。古城内の民家はほとんどが百年以上の歴史を持ち、土と木を組み合わせた手作りのものである。漢族、ペー族、イ族、チベット族など多民族の建築文化が混ざり、装飾、扁額、石碑の彫刻などはナシ族の美感がより反映されている。「四方街」は以前の都の中心で、五色の石畳で出来た路地があり、平坦できれいである。ここを中心に商店や宿が並んでいる。古城内354の橋はいずれも14世紀～ 19世紀に創建されたもので、「四方街」の東100mの位置にある大石橋が最も特色があり、映雪橋とも呼ばれる。橋の下には川面に麗江西北部の玉龍雪山の姿が映る。

中国の国家クラスの歴史的文化名城として、麗江は東巴(トンパ)文化とナシ族の古楽を完全に保護し、発展させている。東巴(トンパ)文化はナシ族の伝統文化で、東巴(トンパ)文字は現在、世界で唯一の「生きた象形文字」とされる。ナシ古楽はナシ族の人々の間で受け継がれてきた古代音楽を指し、唐代(618-907年)、明代(1368-1644年)など古代の国内外の歌詞、歌曲を含み、「活きている音楽博物館」と賞賛されている。

■アクセス

麗江市から南28km離れた麗江空港は、中国の主要都市と国内線で結ばれている。エアポートバスで麗江市内に行くことができる。

蘇州の古典庭園　そしゅうのこてんていえん

【世界遺産委員会の評価】（拙政園、留園、網師園、環秀山荘は1997年12月4日、滄浪亭、獅子林、網園、芸圃、退思園は2000年11月30日世界遺産に登録）

史上有名な都であった蘇州の庭園以上に、中国の古典庭園の理想的な造型美を表現している庭園はない。小さな空間に易の世界を作り出している。蘇州の庭園はこのような思想を作り出している典型として認められている。

これらの16～18世紀に作られた庭園は、その精緻な設計によって、中国文化の中で自然に倣い、また自然を超越した奥深い境地を反映している。

江蘇省蘇州市に位置し、紀元前6世紀頃に建造され、16～18世紀に最盛期を迎える。記録によると、当時の庭園は200ヵ所以上に達したという。現存する数十ヵ所の園林のうち、拙政園、留園、網師園、環秀山荘は明・清（1368－1911年）に作られた江南地方の民俗建築の代表作である。

拙政園は約5万㎡を占め、蘇州古典庭園の中で最大の面積を誇る。最初は、唐代（618－907）の詩人陸亀蒙の住居であった。現在の建造物の多くは、清代の咸豊10年（1860年）に再建され、東・中・西及び住宅の4つの部分に分かれている。中央部分がメインエリアで、池を中心に東屋や建物が水辺に建てられている。「遥香堂」はメインエリアの主な建築物で、堂内の四方には大きな窓が配置され、園内の景色を一望できる。園内全体は水をコンセプトに（水面積は全体の5分の3を占める）、小山や岩、古木、竹、草花などが点在しており、その力強く、素朴ではっきりとした配置は、明の時代（1368－1644年）の庭園の建築様式を代表していることから、「天下庭園の母」と呼ばれている。

留園内の建物の数は、蘇州古典庭園の中でも最多で、庁堂、回廊、白壁、洞門や小山、水池、花、木などの組み合わせによって大小のさまざまな数十ヵ所の庭園が作られている。園内のスペースは建物で4つに区切られており、それぞれ異なる景色（山水、田園、山林、庭園）となっている。また、ガラスのない窓や飾り窓、洞門などを用いて、それぞれの景色を孤立させることなく、融合させている。

網師園は蘇州の中小規模の古典庭園の代表作である。面積は拙政園の6分の1にも及ばないが、荘厳な作りにより、実際よりも大きく見える。園内に庭園があり、園の外にも景色があるような奥深く繊細な作りである。

環秀山荘は、作られた山が中心（山の面積は全体の3分の1を占める）の古典庭園である。湖、岩、作られた山は中国一で、狭い空間に、切り立った山。山脈、渓谷、平地など様々な形式が作られている。

蘇州の庭園は、小さいながらも精巧で、自由、繊細、上品、写意（中国画の手法の1つ）に優れている。また、庭園や建物が融合し、見てよし、遊んでよし、住んでよしという空間である。園林庁堂の命名、額、書条石（文字が彫られた石）、彫刻、装飾などは、庭園に趣を与えたとともに、味わい深い歴史の息吹を醸し出している。

■アクセス

蘇州駅から獅子林、拙政園へはタクシーで6分、滄浪亭と留園も15分程度で行くことができる。

また、各名所までは路線バスが利用できる。

天壇　てんだん

【世界遺産委員会の評価】　（1998年12月2日世界遺産に登録）

天壇は15世紀の前半に建てられた、皇室の庭園である。周りは古松に囲まれていて、良好な状態で保存された壇廟の建築群である。全体の配置から一つ一つの建築まで、すべて天地という考え方を元に建てられ、この天地関係は中国の古代の世界観において核心的な位置を占めている。

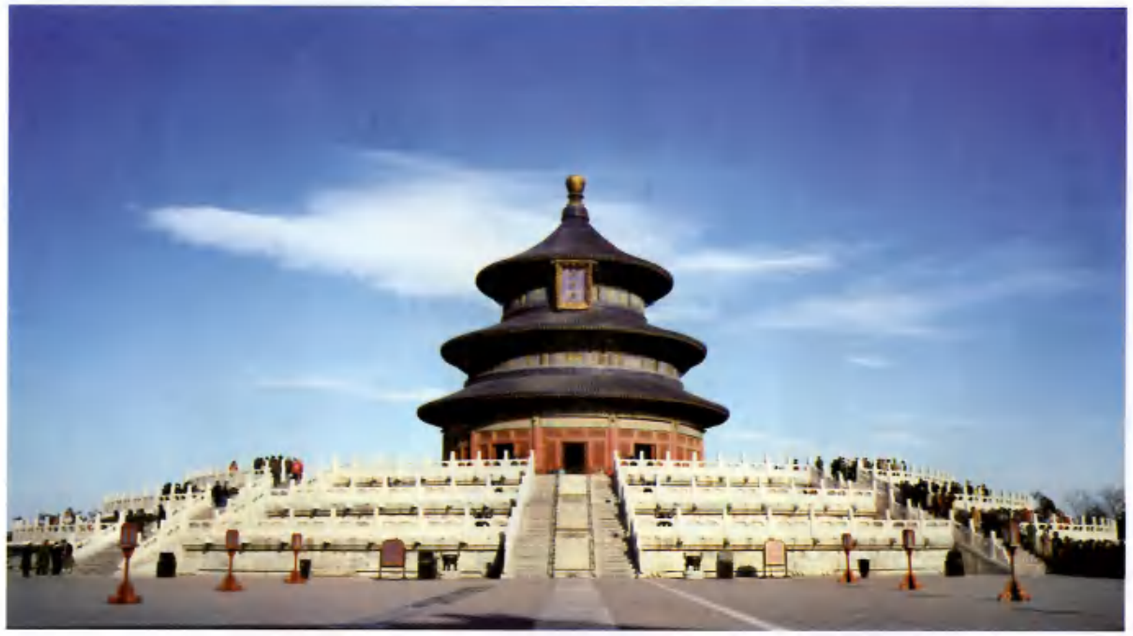
北京市街の東南部に位置し、明代の永楽18年（1420年）に作られ、明代の嘉靖（1522－1566年）、清代の乾隆（1736－1795年）などの時期に増築、改築された。占有面積は273万㎡。中国の多くの皇帝の建物のなかで最も代表的な作品で、中国、更には世界においても、最も良く保存された規模最大の壇廟建築群となっている。

天壇には二重の壁があり、そして内外壇を形成、建物の配置は「回」の字形を呈している。二重の壇壁は北が丸、南が四角になっていて、「天は丸い、地は四角」ということを象徴している。丹陛橋は天壇の建物の中心で、長さ360m、幅は28m、高さ2.5m。南部の圜丘壇と北部の祈谷壇を結んでいる。圜丘壇内の主な建物は円丘、皇穹宇など、祈谷壇内の主な建物は祈年殿、皇乾殿、祈年扉など。圜丘壇は中国古代石造建物の傑作で、皇帝が天を祀り、雨乞いの行事を行う所であった。艾葉青色石で3層円形の石台を敷き、高さは5m、3層のひさしは階を追うごとに上を向き、傘状を呈して、青い瓦、赤い柱などの極彩色の美に輝いている。

天壇内は広い面積の林木と豊富な植生があって、庭園の環境は優美で、「神と人間の調和」と称される。

■アクセス

北京市路線バス6番、34番、35番、106番で天壇北門、729番で天壇南門、729番で天壇西門、43番で天壇東門、天壇に行くことができる。



頤和園 いわえん

【世界遺産委員会の評価】 (1998年12月2日世界遺産に登録)

北京頤和園は1750年に造られたが、1860年戦火で激しく破壊され、1886年に修繕を行った。亭台、回廊、殿堂、廟宇、小橋などの人工景観と自然な山並み、広い湖面が互いに調和し、芸術的に一体になって、中国の庭園風景設計の傑作と称されている。

北京市の西山麓に位置し、元の名前は清漪園という。清朝の乾隆15年(1750年)に造られ、占有面積は2.97㎢。清朝(1616－1911年)皇帝が政務を司った御所、避暑、遊興の御苑であり、中国における最も完全な皇室庭園で、皇室の園林建築博物館と称される。主要な観光地区は重厚かつ威厳ある政治活動区を代表する仁寿殿、生活区を代表する楽寿堂、玉瀾堂、宣芸館、風景游覧区を代表する万寿山、昆明湖に分けられる。

政治的活動区である東宮門(現在の頤和園正門)は、慈禧皇太后(1835－1908年)と光緒帝(1871－1908年)が政務を行う主要な場所だった。中心の建物は仁寿殿であり、現在、殿内は清代宮廷の元の状態に拠って陳列されている。

生活区は政務区と風景区の間にあり、慈禧皇太后と光緒帝および妃嬪の居住する場所だった。楽寿堂、玉瀾堂、宣芸館は数十間の回廊で繋がれ、現状に従い皇太后が使った4万件余りの品物が展示されている。

風景游覧区は園全体の総面積の10分の9を占めており、皇太后たちが楽しく遊ぶ場所だった。そのなかでも、昆明湖は頤和園の主要な構成部分で、総面積の4分の3を占める。湖中にある南湖島が十七孔橋で岸と繋がっている。十七孔橋の長さは150m、幅8m、園内で最大の橋である。万寿山と昆明湖は向かい合っており、建築群は山に依って築かれている。前山には主に仏香閣、排雲殿などの風景区があって、仏香閣が中心となる。仏香閣は前山の中部に位置し、8面3階4層ひさしの木造建築で、高さ41m、園全体を統率し、頤和園のシンボル的な建物となっている。万寿山東側の諧趣園は緻密精巧で、一つの景色となって「園の中の園」と称される。万寿山の後山に主に蘇州街などの名所がある。蘇州街は、もとは商店街と呼ばれ、皇帝、皇太后の游覧のために提供した水街だった。それ以外に、長廊風景区は昆明湖に面して、北は万寿山を背にし、全長728m、世界で最も長い画廊であり、彩色上絵の図画は合計140000数枚にのぼる。

頤和園全体の高度は、「人によって造られたものながら、まるで神が創ったもの」と造園基準を体現している。

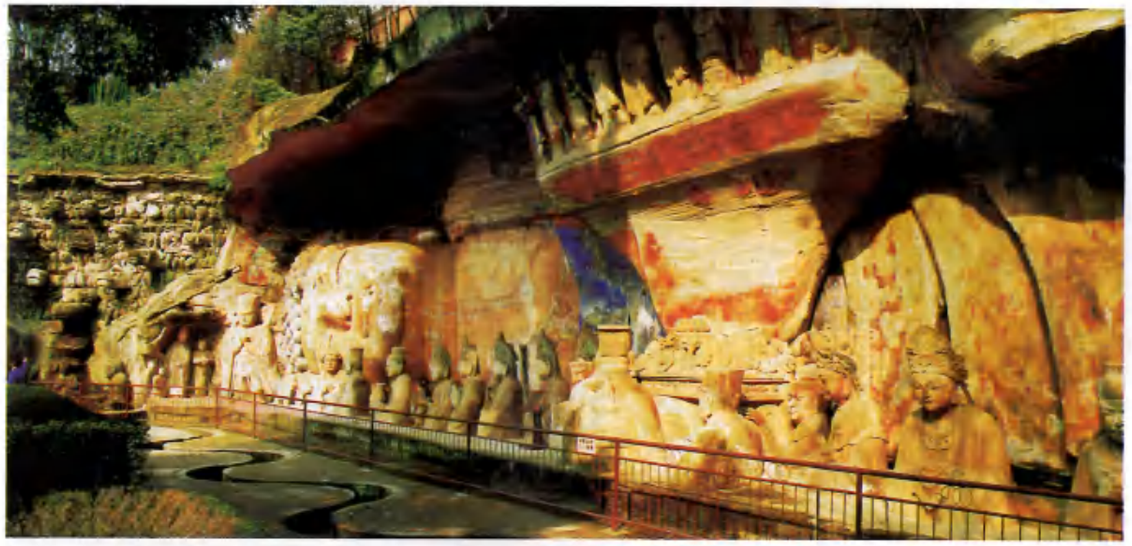
■アクセス

北京市内から332番、333番、718番、726番、374番、904番、375番、384番、808番、716番の路線バスで頤和園に行くことができる。八一湖の観光客は、遊覧船に乗って頤和園に行くこともできる。

大足石刻 だいそくせっこく

【世界遺産委員会の評価】 (1999年12月1日世界遺産に登録された)

大足地区にある険しい断崖に切り開かれた貴重な石刻群は9世紀から13世紀までに刻まれた。石刻は芸術性が高く、精巧で美しく、形の豊富さで世に知られており、世俗から宗教まで、いずれも当時の日常社会生活を鮮明に表現すると同時に、その時期の仏教、道教、儒家思想の調和的な様相を十分に表現している。



摩崖像芸術の大足石刻は大足県にあり、9世紀から13世紀中期まで延々と彫り続けられた。現存の摩崖彫刻は5万数像、銘文は10万余り、100ヵ所余りに分布し、規模が大きく、彫刻が精美、形が多様、内容が豊富、保存状態が完全であることで世界に知られている。

大足の石刻は主に仏教を体裁とし、道教、儒学の像も作られ、一部は宗教的制約を破って、像に人間性が現れている。石刻の中に、数え切れないほどの各階層の人物像があるほか、数多くの社会生活の場面が現れ、石刻芸術が生活を反映した代表的なものである。そのうち、規模が最大なのは北山石刻と宝頂石刻で、唐末期以降の石窟の代表作である。

北山石刻は大足県城北の1.5kmの北山にあり、像が連々と約300mにわたり、唐の晩期景福元年(892年)から造り始められ、南宋の紹興32年(1162年)の完成に至るまで200余年かかった。像の形には50余種類があり、主に当時流行した仏教に関する物語を内容としたものである。現存の彫刻像は4600余りに及び、「唐の晩期から宋代までの石刻芸術陳列館」と賞賛されている。

宝頂山石刻は大足県東北15kmにあり、完璧かつ独特な大型密宗(中国仏教宗派の1つ)道場であり、1万近くの彫刻像がある。そのうち、大仏湾の彫刻像は規模が最大で、最も完全な形で保存されており、唐、宋代における石窟芸術の最高の作品である。世界最大の千手観音と中国最大の半身臥仏がここにある。

このほかの、道教を体裁として像を造った南山石刻は、現存の道教石刻の中において数が最もそろっており、最も集中している石刻群である。

■アクセス

大足の石刻は重慶市の西北約80kmに位置し、重慶市から路線バスで行くことができる。

青城山と都江堰　せいじょうざんとともこうえん

【世界遺産委員会の評価】　(2000年11月29日世界遺産に登録された)
青城山は道教発祥地の一つで、道教の名山として知られている。唐代(618－907年)に建てられた建福宮は規模がかなり大きく、現存の殿宇は清(1616－1911年)の末期に建てられ、規模が最大で、彫刻が精細であり、中にはまだ数多くの貴重な文物と樹齢の古い樹がある。
紀元前3世紀に創建された、四川省成都平原西部の岷江にある都江堰は、世界でも年代が最も古い水利施設である。2200年余りが経っても都江堰は今もなお機能し続け、人々に福をもたらす水利用施設の名に恥じない。

青城山は四川省都江堰市の西南にあり、背後には岷山雪嶺がそびえ立ち、前には成都平原が広がっている。森林は四季を通して青々とし、緑の木々が山全体を覆っていて、環状に連なる峰々は城郭のように見えるため、青城山の名がついた。

ここは、「青城、天下に幽たり」と称えられる通りの独特な景観を成している。

青城山の主峰の老霄頂は標高1600mある。景勝地内に36の峰、8の大洞、108の観光スポットがある。

後漢の順帝漢安2年(143年)、道教の創始者である張陵(張道陵、祖天師)が青城山に入り、この地に伝わる「黄老学説」を学んで道を開いた為、青城山は道教の一派・天師道の発祥の地として神聖化され、道教に「第五洞天(仙人のいるところ)」とされた。天師洞を中心とし、建福宮、祖師殿、上清宮、圓明宮、老君閣、玉清宮、朝陽洞などを含む山全体にある道観はほとんどが青城山の前山にある。前山は青城山名勝区の主要部分で15km²の範囲に広がり、風景の優美さと文物古跡の多さで知られ、多くの観光客を集めている。面積100km²に及ぶ後山には金壁天倉、聖母洞、白雲群洞などがあり、山紫水明、幽静な林、聳え立つ山、怪石などの自然の風景は神秘的な美しさを持つ。

四川省都江堰市の西にある都江堰は「独奇千古(千古にも独特な水利施設)」の「鎮川之宝(川を治める宝)」と称えられている。都江堰は紀元前3世紀に建設が始められた。秦の昭襄王の51年(紀元前256年)から、当時の蜀郡の太守(地方長官)李氷と息子が、民衆を率いて、この大型水利工事に着手した。都江堰は世界水利施設の中で最も古い施設であり、また、現存する唯一の、ダムを造らず分水する「魚嘴」、土砂を灌江から排出する「飛沙堰」、灌江の水を運河へ導水する「宝瓶口」という3つの堤防状構造物からなる規模がかなり大きな水利施設である。宝瓶口の自然風景は美しいため、「離堆鎖峡」と称され、有名な蜀の歴史的観光物の一つとなっている。

■アクセス
成都市から48kmの都江堰市は、鉄道と路線バスで行くことが出来る。
青城山は都江堰の西南10kmに位置し、路線バスで行くことが出来る。

龍門石窟　りゅうもんせっくつ

【世界遺産委員会の評価】　(2000年11月30日世界遺産に登録された)
龍門地域の石窟や仏龕などには、北魏の晩期から唐代(493－907年)に栄えていた芸術様式が現れている。仏教における宗教をモチーフにしたこれらの芸術作品は、中国の石造芸術の最高峰と言える。

河南省洛陽市から南に13kmの場所にあり、北魏の孝文帝時代(471－499年)に掘削が始められ、400年以上を経て完成した。甘粛省の敦煌石窟、山西省の雲崗石窟とともに、中国三大石造芸術の宝庫に数えられる。

龍門石窟は水辺に近く、東西を山に挟まれた断崖絶壁に分布しており、南北に1kmにわたって見られる。10万体余りの仏像が現存しており、最大で高さ17.14m、最小のものはわずか2cmである。石窟内には仏龕が2300ヵ所以上、題辞や碑文が刻まれたものが2680点以上あり、世界最大の石窟と呼ばれるにふさわしい数を誇っている。

龍門石窟は石造芸術博物館と呼ぶにふさわしく、特に賓陽中洞、奉先寺、万佛洞、古陽洞などが代表的である。

賓陽中洞は賓陽三洞の1つであり、北魏(386－534年)の石造芸術の代表作である。完成までに24年かかり、掘削期間としては最長である。洞内には11体の仏像があり、鼻筋が通り、大きな目をした本尊の釈迦や、洞内の天井部分に彫られた彫刻などは、中央アジアの芸術の香りが残っている。

奉先寺は唐代(618－907年)に掘削された龍門石窟では最大で、長さ、幅ともに30m以上ある。石窟の中央にある盧舎那仏挫像は龍門石窟の中で最も大きく、高さ17.14m、耳だけでも1.9mもあり、ふくよかで生き生きとしている。

万佛洞は長さ約500mの山洞で、洞内には15000体以上の大きな異なる仏像がある。中には、わずか数センチの仏像もあるが、力強さは十分である。

古陽洞は北魏(386－534年)に掘削が始められた。龍門石窟の中では最も早い時期に掘削が始められ、内容的にも最も多彩である。洞内には小さな厨子が至る所で見られ、彫刻も繊細である。また、碑文などが彫られたものも数多くある。北魏の時代の書道芸術としては最高傑作と言われている龍門20品だが、そのうちの19品がここにある。

■アクセス
洛陽市内から龍門石窟までは路線バスで行くことができる。洛陽市から北西に10km離れた洛陽空港は、中国の主要都市と国内線で結ばれている。

安徽省南部の古村落：西遞、宏村 あんきしょうなんぶのこそんらく：せいてい、こうそん

【世界遺産委員会の評価】　（2000年11月30日世界遺産に登録された）

西遞、宏村という2つの伝統的な古村落は、ほとんどの部分が19世紀に消滅したり、姿を変えてしまったりした中国古代農村の面影を残している。道の様式や旧建築、装飾物、給水システムなどが整備された住居群は、特色の強い文化遺跡である。

安徽省黄山市黟県に位置する代表的な徽派建築である。さわやかな田園風景、素朴な村落のスタイル、技術レベルの高い徽派の住居、重厚で奥深い文化的要素などにより名を馳せている。

西遞は黟県の県城から8km離れており、北宋の皇祐年間（1049－1053年）に建造され、900年以上の歴史がある。古くは胡氏一族が暮らしていた土地で、凌雲閣、刺史牌楼、瑞玉庭、桃李園、東園、大夫第、敬愛堂、履福堂、青雲軒、膺福堂などの明（1368－1644年）、清（1616－1911年）の旧民家124棟、祠3棟があり、「中国明清民家博物館」と呼ばれている。西遞村落は船形をしており、四方を山に囲まれ、2本の渓流が村を貫いている。村落の道は水に面して建造されており、石畳になっている。両脇の旧建築物は素朴ながら気品がある。建物はほとんどが木造で、そしてレンガの堀で囲まれている。木、石、レンガの使用により変化の富む構成を見せてくれている。村の入口にある胡文光刺史牌坊は、明代の万暦6年（1578年）に建造された5階建て3棟の建物で、胡氏一族の輝かしい地位の象徴である。村の中央に位置する敬愛堂は1800㎡の面積があり、西遞村に現存する最大の祠である。民家はどれも豪華で、庭も精緻に作られており、「配置の技、構造の妙、装飾の美、建築の髄」は、中国国内の旧民家でも他に見られない。

宏村は黟県の県城から北東10km地点に位置し、南宋の紹興元年（1131年）に建造され始めた。古くは汪氏一族が暮らしていた土地で、明・清時代（1368－1911年）の旧建築物137棟が現存している。高い所から見ると、宏村は山の前の渓谷に寝そべっている牛のように見える。村落には旧民家の白壁や瓦が整然と並んで見える。その中でも、承志堂は2000㎡以上を占め、その広大で美しい姿は「民間故宮」と呼ばれている。堂内には様々な木彫りの彫刻があり、精巧で生き生きとした様子は、現在でも輝きを失っていない。また、敬修堂、東賢堂、三立堂、叙仁堂も風格があり、素朴ながらも厳かである。さらに、空高く聳える古木や、民家の堀の藤の老木や庭の牡丹などによって、少しずつその絵のような情景にひきこまれる。また、この土地は一年を通して霧に覆われることが多く、名実ともに「水墨画の世界」である。

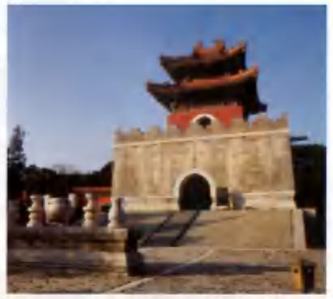
■アクセス

黄山市屯溪から5km離れた黄山空港は、中国の主要都市と国内線で結ばれている。屯溪から西遞までは路線バスで約75分程度。西遞から宏村まで路線バスで約30分。

明・清王朝の皇帝陵墓群 みん・しんおうちょうのこうていりょうぼぐん

【世界遺産委員会の評価】（明の顕陵、清の東陵、西陵は2000年11月30日、明の孝陵、十三陵は2003年7月3日、盛京三陵は2004年7月1日世界遺産に登録された）

明・清時代の皇室陵墓は風水の理論によって、入念に土地を選び、数多くの建築物を巧みに地下に配置している。500数年も続いた中国の封建的世界観と権力を物語っている。



明（1368－1644年）清（1616－1911年）二朝代の皇帝陵墓の建築群は、明孝陵（みんこうりょう）、明十三陵、盛京三陵、清東陵、清西陵を含めて、主な建物は完全な状態で保存されており、明清皇室陵墓の元の姿を残している。

明・清の時代は中国封建社会の陵墓建設史において輝かしい時期といえる。

明朝を建国した皇帝・朱元璋（1328－1398年）が陵墓の制度に対して重大な改革を行った。彼は地上の土の山をもって、以前のバケツ形を四角形あるいは長円形に変え、また寝宮殿をやめ、祭殿の建物を拡大して、明・清代の皇帝陵墓の制度を創設した。彼が没した後、江蘇省南京市東郊外の明孝陵に埋葬された。

明顕陵は湖北省鍾祥市の東郊外に位置し、明嘉靖皇帝（1507－1566年）の父母を合葬する墓で、中国で最も特色ある帝王陵墓となっている。特色としては、陵墓の主が生前一日たりとも皇帝の座に就いたことがなく、嘉靖皇帝が帝陵の制度によって、王陵を改築したもの。このような王墓を帝陵に改めた双墓は全世界でも珍しい。

明十三陵は北京市昌平区北部の天寿山麓に位置して、1409年の長陵建造から始まって、1644年に明が滅び、崇禎帝（1611－1644年）が思陵に埋葬されるまで、建造期間は230年余りに及んだ。明朝が北京に遷都した後の、13人の皇帝陵墓の総称。長陵はその中で規模最大のもので、約12万㎡を占めている。

清朝は明朝の制度を踏襲し、いっそう陵墓と周囲自然の結合を重視していた。また皇后と妃嬪の陵墓の配置序列を決め、祭祀制度上でもいっそう改善した。

盛京三陵は遼寧瀋陽（盛京は瀋陽の古称）に位置し、満清朝の皇室事業を創始した三名の清朝の皇帝の陵墓であり、福陵、昭陵と永陵が含まれる。

清東陵は河北省遵化市に位置し、全部で15基の陵墓があり、墓道の総延長は14500m。中国で現存する規模が最大で、体系が最も整っている帝王陵墓の建築群である。

清西陵は河北省易県に位置する、中国の陵墓建築群で最も保存状態が良い陵墓の一つで、中国最後の封建帝王の陵墓群である。

■アクセス

北京市内から遊1番、遊2番、遊3番、遊4番、遊5番の観光バスで明十三陵に行くことができる。

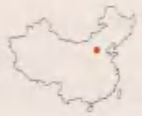
南京市内では20番の路線バス、遊2番、遊3番の観光バスに乗り、明孝陵で下車する。

荊門鍾祥市区は明顕陵までの直通バスがある。

雲崗石窟　うんこうせっくつ

【世界遺産委員会の評価】　(2001年12月1日世界遺産に登録された)

山西省大同市に位置する雲崗石窟は、洞窟で造られた仏壇が252あり、51000体以上の仏像がある。5～6世紀の中国の石窟を利用した仏教芸術の傑作である。中でも、曇曜五窟は、設計が厳格に統一されており、中国の仏教芸術が最初に繁栄した頃の傑作である。



山西省大同市に位置し、北魏の和平元年(460年)に建造され、1500年以上の歴史がある。敦煌莫高窟、洛陽龍門石窟とともに、「中国三大石窟群」と呼ばれている。中国の重要文化財で、最高ランクの観光スポットである。

雲崗石窟は掘削の時期によって、前期、中期、後期に分けられ、それぞれ石窟様式が異なる。中でも最も早く掘削され、力強いのが現存の第16番石窟～第20番石窟に当たる曇曜五窟である。言い伝えによると、「曇曜五窟」は北魏の和平年間(460－465年)に、当時の僧、曇曜和尚により掘削されたという。石窟は力強く、重厚かつ素朴な中国西部地方の情緒を有している。外観は楕円形で、内部は広く、中央には北魏の皇帝をモデルにした巨大な如来像がある。その中で、第20番石窟の主な仏像は高さが13.75mで、がっちりとした体格である。袈裟は右側がはだけており、丸々とした輪郭に、薄い唇、高い鼻が特徴的で、雲崗石窟の代表作である。中期の石窟は、繊細な彫刻や華美な装飾で有名である。後期の石窟の内部は小さく、人物のイメージも痩せて美しい。バランスがよく、中国北部の石窟芸術の典型であり、「秀骨清像」の起源でもある。石窟群の中で、生き生きとした人物像のほかに、古風で素朴で様々な様式の木を模した建築物がある。傑出し、熟練した技術の仏像彫刻をテーマに、デザインに富み、美しく精巧な装飾や琴、笛、琵琶など中国古代石窟は中国の秦・漢時代の芸術の優れた伝統を受け継ぎながら、インド仏教芸術を吸収して、「雲崗モデル」を形成し、中国仏教芸術の転換点となった。

■アクセス

雲崗石窟は北京から西に約320kmの大同市郊外に位置し、市内からは3－1番、3－2番、10番の路線バスが雲崗まで通じている。直通バスも運行されている。

高句麗王城、王陵及び貴族の古墳　こうくりおうじょう、おうりょうおよびきぞくのこふん

【世界遺産委員会の評価】　(2004年7月1日世界遺産に登録された)

この史跡には、五女山城、国内城、丸都山城という古城や40以上の古墳が含まれている。その中の14の古墳が王陵で、残りの26の古墳が貴族の墓である。これらは高句麗文化に属する。

丸都山城にもかつては高句麗の都が置かれ、現在でも大規模な宮殿や37の古墳など多くの歴史的遺構が残っている。一部の古墳には、上方の石や地面の基礎を支えるための梁のない丸天井がある。

主に吉林省通化集安市と遼寧省本溪市桓仁県に分布している。高句麗は前漢(紀元前206－25年)から隋、唐(581－907年)まで、中国北東部に現れた多大な影響力を持った辺境民族で、その活動地域には五女山城、国内城、丸都山城など数多くの遺跡が残されている。

五女山城は高句麗王朝の最初の都で、広大な規模と整ったシステムを有し、保存状態も比較的良好である。城内の多くの場所には、高句麗初期の貴重な生活構造物や、防衛関連の遺跡が分布している。

国内城、丸都山城は高句麗王朝早期～中期(1－5世紀)の都で、最も長い間、都として使った場所である。国内城の残存している城壁は、今なお頑丈で、荘厳な美しさも失っていない。丸都山城は山の形状に合わせて建造されており、自然の風景と人類の思想が一体となって現れている。

国内城と丸都山城の城外の洞溝古墳群と言える。古墳群は武士墓地、太王陵が代表的で、十数個の大規模な高句麗王陵や壁画が書かれた大量の王室貴族の墓が現存している。群人墓地はピラミッド型をしており、正方形の雛壇状の石室を有しており、石で建造された高句麗王朝晩期の典型である。太王陵は、高句麗王朝の第19代の王、好太王の墓であり、規模も大きく、修復も行き届いている。その東側には好太王碑があり、漢字で碑文が刻まれている。現在まで残っている高句麗王朝の文献資料の中では、一番長いものである。これらの史跡は、高句麗王朝の他に代え難い歴史的物証であり、貴重な歴史文化価値を有するものである。

■アクセス

瀋陽市から遼寧省桓仁までは路線バスで行くことができる。桓仁から五女山城までは車で10分程度。

瀋陽市から吉林省集安の丸都山城、好太王碑、将軍塚までは路線バスで行くことができる。

マカオ(澳門)旧市街　まかお(おうもん)きゅうしがい

【世界遺産委員会の評価】　(2005年7月15日世界遺産に登録された)

澳門(マカオ)は重要な国際貿易港として、16世紀にポルトガルによる植民地支配が開始され、1999年になってやっと中国に返還された。残存する古い街道、地域、ポルトガル式や中国式の建築物によって、澳門は東西の文化、建築物、科学技術が行き交っていた時代の生きた証人となっている。これらの史跡の中には、要塞や中国最古の灯台が聳え立っており、中国と西洋世界との初期における交易を見続けてきた。

澳門の世界遺産エリアは旧市街地を中心にして、隣接する広場や大通りが連なるように形成されている。

媽閣廟、港務局、隣家屋敷、聖ローレンス協会、聖ヨセフ修道院及び聖堂、ドン・ペドロ5世劇場、ロバート・ホー・トン図書館、聖オーガスティン教会、民政総署、三街會館(関帝廟)、仁慈堂、大堂、盧家屋敷、聖トミニコ教会、聖ポール天主堂跡、ナーチャ廟、旧城壁、モンテの砦、聖アントニオ教会、カーザ庭園、プロテスタント墓地、ギア要塞など22ヵ所の建築物と、それらの建築物にそれぞれ密接に関連するパラ広場、リラウ広場、イエズス会記念広場、カモンエス広場など8ヵ所の広場がある。

ここは中国で最古、最大規模の、保存状態のよい、中国と西洋の特徴を有する建築物が多く集中、共存する歴史建築エリアである。これは、400年以上にわたる中国と西洋文化との交流の結晶である。

16世紀中頃、明朝(1368－1644年)政府は澳門半島南西の一部を、ポルトガル人を中心とする外国商人が住居したり貿易を行ったりする場所として提供した。これが国際都市・澳門の誕生である。現在の澳門の歴史建築エリアは、当時の中心地に当たる。

かつて中華文化と西洋文化が混在した旧市街地は、400年以上が過ぎた現在でもなお当時の面影を残すとともに、「中国で一番」を数多く打ち立てている。澳門の歴史エリアには、中国最古の教会の遺跡や修道院、最古のキリスト教の墓地、最古の西洋式砲台などの建造物がある。その他にも、中国初の西洋式劇場、近代的灯台、西洋式の大学などがある。

澳門の旧市街の多くの建築物は、中国と西洋の特色をあわせ持っており、現在もなお本来の機能を保ち続けている。澳門の旧市街では、多様な宗教文化が栄え、カトリック、プロテスタント、仏教、道教、媽祖などが今なお現存している。大三巴牌坊は東西の宗教が互いに融合した最高傑作である。

■アクセス

マカオ国際空港空港からマカオ市街地まではタクシーで 10 ～ 20 分。ほとんどの世界遺産はマカオ市街地のほぼ 2km 圏内に集中している。徒歩でも十分見て回ることができる。

殷墟　いんきょ

【世界遺産委員会の評価】　(2006年7月13日世界遺産に登録された)

殷墟遺跡は中国早期の文化や工芸、科学の黄金時代を表し、中国の青銅器文化が最も繁栄した時期でもある。殷墟遺跡からは王室陵墓、宮殿跡などが発掘されている。出土した精巧な大量の甲骨に書かれた文字は、中国古代の信仰や社会制度、世界最古の文字体系と言われる漢字の発展を明らかとするもので、計り知れない価値を持っている。

河南省安陽市の北西にある小屯村一帯に位置し、世界的に有名な中国の殷(商)王朝後期(紀元前1300－前1046年)の遺跡である。また、中国史上、文献が残っており、甲骨文や発掘資料によって証明された最古の都城遺構でもある。殷墟は24㎢ほどの敷地を占め、宮殿・宗廟区、王陵区、庶民の集落跡、墓地、甲骨を埋めた穴、青銅を鋳造所、玉や甲骨を作っていた工房など多くの遺構が現存している。その中でも、宮殿・宗廟遺構と王陵遺構が中心である。

宮殿・宗廟遺構は、殷(商)の皇帝が政府用や居住用としていた場所で、主に黄土や木材で作られている。多くは土台を厚く盛り固めた場所に建てられており、木の柱や土の壁、茅葺の屋根などが用いられた。これらは、中国古代では最先端の宮殿建築である。また、甲骨が埋められていた穴も主に宮殿・宗廟遺構に分布している。甲骨文は亀甲や動物の骨に刻まれた古代文字であり、この遺構からは甲骨約15000個が出土している。特に、YH127甲骨窖穴、小屯南地甲骨窖穴、花園荘東地H3甲骨窖穴が有名で、内容的にも富んでいる。殷(商)時代の社会生活の一面を知る事ができ、中国のみならず、人類最古の「書庫」と呼ばれている。

王陵の遺構は川を隔てて宮殿・宗廟の遺構と相対している。殷(商)の皇帝の御陵であり、祭祀なども行われた。また、中国で今まで見つかった保存状態の完全な陵墓群としては、最古のものである。遺構からは12個の陵墓と2500以上の祭祀用の穴が見つかっている。陵墓の多くは、「亜」「中」「甲」の型をしており、棺が安置された空間も大きい。最大の陵墓では面積1803㎡、深さ15mにも達する。納められた棺は豪華で、埋葬品も美しく、殉葬者も多いことから、中国早期の陵墓建築の粋を極めた事が分かる。

また、青銅器、玉に代表される殷墟の文物も、殷(商)代後期の文化や伝統を伝える証拠となっている。

■アクセス

安陽駅から路線バスで王陵遺構・宮殿・宗廟遺構に行くことができる。

開平の望楼と村落　かいへいのぼうろうとそんらく

【世界遺産委員会の評価】　（2007年6月28日世界遺産に登録された）

開平望楼と村落は世界でも最も美しい村落の一つであり、中国と西洋の異なる文化を融合した手本といえ、このような歴史文化遺跡は世界で唯一無二である。

広東省開平の村落は望楼と望楼が建てられた村落で世界にその名をよく知られている。これらの望楼は、清王朝（1616－1911年）初期に最初に建設され、防御、住居、中国の伝統的建築と西洋の現代建築を折衷させた建築芸術を一体化した多層塔建築である。

開平の望楼と村落群は、中国の華僑の歴史、社会形態および文化伝統を表現する独特な建築群である。昔、開平は頻繁に水害に襲われ、社会秩序が乱れていた為、不測の事態に備え、また防御のために、村長たちは洪水及び土匪対策の望楼を続々と建て始めた。清代（1616－1911年）末期から民国（1912－1949年）時期に、多くの人々は開平を後にし、海外へ移住した。中国様式を守りながらも西欧文化に深く影響されたといえる中西混合式の望楼は帰国者によって建てられ、最盛期には3000棟以上に及んだ。

開平市内の望楼は縦横数十キロにわたって並び、素晴らしい景観をなしている。望楼の底部はほとんどが同じ形で、一般の住宅より高く、壁が丈夫で、窓は比較的小さいもので、その上に鉄の欄干、鉄板の窓と扉が付け加えられている。望楼の最も魅力的で際立った表現を見せているのは屋根のスタイルである。建築様式としては中国式建築の特徴も入り混じり、中西混合式、ローマ式アーチ、アメリカ城砦式、欧米の別荘式、庭園式などを取り入れた多種多様なスタイルである。

開平の望楼は、使用されている建築材料によって、石、レンガ、版築（土を突き固めてつくる土壁の建築法）、コンクリートという4種の建築に分かれる。そのうち、コンクリート構造によるスタイルは中西混合式の建築特色が具現されている。華僑は世界各国の建築芸術設計を参考にし、セメント、砂、石、鋼材を使い、丈夫で耐久性にすぐれたものを建てた。

機能面から分類すると、衆楼、居楼、更楼の3つに分けられる。衆楼は全村あるいは数軒の家がお金を出して共同で建てたもので、緊急避難用に各家に一つ部屋が与えられる。居楼は豊かな家々が独自に建てたもので、生活及び防御機能をもつ。階層が高く、部屋が広く、生活に必要な施設が完備されている。更楼は主に村の外の丘の上や川岸に建てられ、山賊を見つけやすく、警備の役割を持つ。

■アクセス

広州市から開平市までは路線バスで行くことができる。世界遺産は開平市のほぼ30km圏内に集中し、現地の路線バスで回ることができる。

福建土楼　ふっけんどろう

【世界遺産委員会の評価】　（2008年7月6日世界遺産に登録された）

福建土楼は、世界で類を見ない居住地域と防御機能が一体となった山岳民家建築である。その形や様式はこの地に根付いた儒教の伝統的なパワーの表れ、外敵への防御という現実的な必要性によるものである。また、土楼は山や川だけでなく、空や土地とも融合しており、まさに人類の民家の傑作である。

主に福建省西部と南部の険しい山脈に点在し、独特の建築スタイルと長い歴史を誇る文化で有名である。福建省永定県の高北土楼群、洪坑土楼群、初溪土楼群、衍香楼、振福楼や、南靖県の田螺坑土楼群、河坑土楼群、和貴楼、懐遠楼や、華安県の大地土楼群などがある。

宋元（960－1368年）時期に見られ始めた福建土楼は、世界でも類を見ない土を用いた大規模な山岳民家建築である。土楼は人々が集まって生活をしたり、防衛をしたりするに適しており、山間の狭い土地で、木材、土石などの自然の建築材料を用いて、体系的、経済的、堅固で、防御力が高く、美しさも備えている。土楼のデザインは様々で、円楼、方楼、五鳳楼、凹字型、半円型、八卦型に分けられる。中でも円楼と方楼が多く見られる。簡単な幾何学模様の建築物で、険しい峡谷に建てられ、周囲の自然景観と強烈に対比しつつも、一体となっている。円楼は防御が重視されており、一般的に面積も広く、最大のものでは直径71mに達する。通常は最下層が食事、調理スペースで、2階が倉庫、3階より上が居住空間となっている。永定土楼は独特の円楼デザインであり、福建土楼の代名詞となっている。方楼は土楼の中でも最も普及しており、一般的に正方形か正方形に近い形状の高い堀を備えており、塀に沿ってその他の建築物が広がっている。階層の使われ方は円楼と同じだが、高いものでは6階建てに達し、木製の床や梁が用いられ、瓦屋根である。

土楼に共通する特徴としては、工期が長いことが挙げられ、通常で竣工まで2～3年かかる。防風、防水、耐震性に優れている。また、構造が極めて規則的で、部屋の間取りやサイズは統一されており、機能性が追求されている。場所の選定や命名にもこだわりが見られる。

■アクセス

福建土楼はアモイ市の西約150kmから200kmの永定県、南靖県の山中に分布している。高速道路が開通し、バスでアモイ市内から福建土楼に行くことができる。

五台山　ごだいさん

【世界遺産委員会の評価】　（2009年6月26日世界遺産に登録された）

頂上部が平らな台状である5つの山峰からなる五台山は仏教聖地である。山中には53の寺院が盤上の棋石のようにびっしりと分布している。仏教建築が集中する場所として、この世界遺産指定地は千余年前の発展過程を示すだけではなく、中国の宮殿建築に大きな影響を与えてきた。

五台山は世界五大仏教聖地の1つであり、中国の四大仏教の名山のトップの地位にある。山西省東北部に位置し、東、南、西、北、中の5つの山峰に囲まれ、峰頂が平坦で広く、あたかも土台のようなので、五台山と名づけられた。

悠久な歴史を持つ五台山には寺院が林立し、数多くの貴重な古代建築、彫塑、壁画などの文物が保存されている。早くも後漢の永平11年（68年）から構造が始まり、ここは国内唯一の青廟（漢族仏教）と黄廟（チベット仏教）が山に共存して経を講義し、法を説く法道場である。風景区内には紀元4世紀から19世紀までの北魏、唐、宋、元など7つの朝代の寺院建築47ヵ所が保存され、7つの朝代の彩塑、5つの朝代の壁画などが集まっている。南禅寺は現存する世界最古の木構造建築の一つである。仏光寺は東方最古の真珠と称されている。五台山のシンボル的な建築である大白塔は現存する元代（1206－1368年）で最高の覆鉢式塔（仏舎利塔）である。五台山風景区には山々が重なり合い、樹木が生い茂り、夏になると花が咲き乱れるが、山頂の氷は千年も融けない。景色が素晴らしく、気候も爽やかなため、古来より名高い避暑地となっている。

■アクセス

太原市から五台山まで路線バスで行くことができる。また、繁峙県砂河鎮にある五台山駅から五台山（台懐鎮）までは48kmの距離で、中型のシャトルバスが運行している。

「天地之中」歴史建築群　「てんちのなか」れきしけんちくぐん

（2010年8月1日世界遺産に登録された）

「天地之中」歴史建築群（嵩山歴史建築群とも呼ばれる）は河南省鄭州市登封嵩山（すうざん）の山岳にある。最高峰は太室山の標高1440m。嵩山三闕銘（すうざんさんけつめい）と中岳廟、嵩岳寺塔、少林寺建築群（常住院、初祖庵、塔林）、会善寺、嵩陽書院、観星台など、漢、魏、唐、宋、元、明、清時代に建てられた8ヶ所11件の歴史的建造物が世界遺産に該当となった。

嵩山三闕とは、118年から123年にかけて建てられた嵩山太室廟の石闕、少室廟の石闕、開母廟石闕のことである。廟はいずれも廃られ、石闕のみが残されている。三闕銘が漢時代のもので、隷書が公式書体であった漢代にあって、極めて珍しい篆書による金石文である。3つとも全て現在も建造地に残されている。

中岳廟は太室山南麓の黄盖峰にあって、前漢の武帝（ぶてい、紀元前156年－前87年）が嵩山を見物した時、祠宮を大規模に建造させた。現存する廟の構造は明時代のもので、廟の大部分は清時代の間に改修されたものである。中岳廟の敷地面積は117000㎡あまり、現存する中国五岳の中で規模が最大で、完全に保存された歴史的建築群である。

嵩岳寺塔は嵩山南麓に位置し、北魏孝明帝正光年間（520－525年）に建てられた、中国で現存する最も古いれんがの塔である。塔は台座、塔身、塔刹からなり、平面が十二辺形の形で、高さは36.78mである。塔は煉瓦で建造られ、1490年を経ってもそびえ立っている、人類古建築史の典範である。

少林寺常住院は五乳峰に位置し、北魏太和19年（495年）孝文帝期に建造された。常住院の敷地面積は36000㎡で、院内に明、清時代の建物が沢山残されている。

少林寺初祖庵は宋時代の少林寺僧侶が仏教禅宗の開祖――菩提達磨を記念するために建造した建物で、常住院西北の亀の背中の形をする丘にある。庵には山門、大殿、千佛閣、大殿後ろの東側に聖公聖母亭、西側に面壁亭などの建物がある。大殿は北宋時代に建造された建物で、他の建物は明、清以降に改修された。また、庵内には宋、金以降の碑碣が40あまりある。

少林寺塔林は少林寺院の西にあり、少林寺歴代高僧の墓地である。塔林には唐、五代、宋、金、元、明、清7時代の古塔228あり、そのうち単層単檐塔，単層密檐塔，印度窣堵波塔と各種喇嘛式塔がある。

会善寺はもともと北魏孝文帝が建造した離宮で、魏が滅亡した後に寺になった。隋代開皇5年（585年）に嵩岳寺という名に改名され後、隋文帝が会善寺という名を賜った。唐代に殿宇、戒壇和窣堵波を建造した。会善寺は規模が大きく、高僧をたくさん輩出した。五代後梁時代に一度廃棄されたが、宋太祖時代から再度仏殿を修築した。また、元、明、清時代にも改したことがあり、現在、寺には常住院、戒壇遺跡、古塔、碑碣がある。

嵩陽書院は嵩山南麓の峻極峰に位置し、北魏太和8年（484年）に建てられ、最初の名は嵩陽寺であった。宋景祐2年（1035年）太室書院を改修後、嵩陽書院になった。書院の敷地面積は9984㎡、建築配置は清時代の風格で、現存する清時代の建築は25ヵ所である。中軸線上の建物は南から北まで、順次に大門、先聖殿、講堂、道統祠、蔵書楼である。嵩陽書院は河南睢（スイ）陽書院（応天書院も呼ばれる）、湖南岳麓書院、江西白麓洞書院とともに中国四大書院と称される。

観星台は登封市告成鎮の北側に位置し、周公測景台、周公廟とともに5550㎡の面積を占めている。観星台は元世祖至元13年～16年（1267－1269年）に建てられ、中国で最も古い天文台である同時に、世界的にも天体の現象を観測する最も早い建築物の一つである。

■アクセス

鄭州市から少林寺まで約70km、路線バスで行くことができる。

杭州西湖の文化的景観　こうしゅうせいこのぶんかてきけいかん

【世界遺産委員会の評価】　（2011年6月世界遺産に登録された）

「杭州西湖の文化的景観」は、傑出した典型的な文化景観で、景観に対する中国の美学思想を明確に反映し、中国だけでなく世界の庭園設計に大きな影響を与えた。

杭州西湖の文化的景観は、中国浙江省の省都杭州市内の西に位置し、周囲が15kmで、北、西、南の三方が山に囲まれ、東だけが杭州市街と接している。西湖と丘陵にひろがった、堤や湖心亭などの人工な島々、数多くの寺院群、仏塔群、東屋群、庭園群、柳などの観賞用の木々が織りなす美しい景観は、9世紀以降、白居易や蘇東坡（蘇軾）などの有名な詩人、学者、芸術家を魅了した。

西湖の自然の島である孤山、西湖を分ける堤の蘇堤・白堤・楊公堤、人工的に作られた島である小瀛洲・湖心亭・阮公墩、分けられた湖の外湖・西里湖・北里湖・南湖・岳湖、これらをまとめて形状を「一山、三堤、三島、五湖」と称される。2006年に、中国の国家AAAAA級観光景区に指定される。この文化的景観は、杭州市内の西から長江の南に至る一帯の景観のみならず、何世紀にもわたって、日本や韓国の庭園設計にも影響を与えた。霊隠寺、六和塔などの景観を含んだ杭州西湖の文化的景観は、人と自然の理想的な融合を表現するという、庭園造成の文化的な伝統を、今につたえる貴重な事例です。

■アクセス

中国東南部、上海から西に約160kmに位置し、高速列車に乗って49分間で到着できる。日本から杭州（蕭山）空港までのフライトは約3時間で結ばれている。

元時代上都の遺跡　げんじだいじょうとのいせき

【世界遺産委員会の評価】　（元時代上都の遺跡は2012年世界文化遺産に登録された）

元時代上都の遺跡は1256年にフビライの幕僚の劉秉忠氏（漢民族）が、伝統的な漢民族の風水理論に基づいて都を設計し、背面を山に都の近くには河川が流れる建築方法である。その発想はモンゴル族遊牧文化と漢民族農耕文化の融和である。また、大理石で出来た宮殿があり、建物の内部はみな金で塗られ、鳥獣花木の絵が描かれるなど工芸や技術の粋を尽くした装飾がなされている。その姿は、ヨーロッパ人の想像力に影響を与えた。

元時代上都は、万里の長城の北に位置し、25,000万㎡以上の総面積を持ち、フビライは元時代上都を拠点として、百年の間、元朝を創立し中国に君臨した。

元時代上都はほぼ正方形に近い形状をしており、外側から、総延長17里（一辺の長さ2.2km）の外城、一辺の長さは1.4kmの内城、内城中央の南北軸上の北寄りにあり、面積は現在の北京の紫禁城の40%ほどの大きさであった。また、南北の長さ620m、東西の長さ570mの長方形で宮城の三つの正方形の都城も存在し、東西には、東涼亭と西涼亭という狩猟用の行宮も存在している。

内城と宮城は線対称な配置になっており、後に建設された元代大都(今の北京市にあった)の平面計画に相似しているが、外城は内城・宮城の中心軸からずれた位置にあり形も対称ではない。現在は元時代上都の遺跡の中に宮城の各宮殿の基壇や、古墳、宿営地並びに鉄幡竿の人工水路、内城の東の城壁の一部などが古代の遺跡が大量残されている。

■アクセス

元時代上都の遺跡は内モンゴル自治区シリンゴル自治区にあり、ドロンノール県中心市街地から北西へ28km離れており、灤河（らんが）上流の閃電河の河畔に位置する。北京からは北へ275kmどの距離である。

紅河ハニ棚田　こうがハニたなだ

【世界遺産委員会の評価】（紅河ハニ棚田は2013年6月22日世界文化遺産に登録された）

紅河のハニ族の棚田文化景観を表す森林、水系、棚田と村"四ヶ要素の相互依存"のシステムは世界遺産の基準に一致している。奥深い農業、林業と水分配システムを完全に反映し、連動している。まだ、ユニークなシステムは現地の社会経済宗教の連係を強化し、人間と環境の重要なモデルとの相互作用を強調している。

■アクセス

雲南省の省都である昆明からまずバス（270km）で紅河州の州都・蒙自県へ行き、元陽の新県城行きのバスに乗り換える。そこでさらにバスを乗り換え、約30km離れた旧県城の新街鎮へ。

紅河ハニ棚田は、中国雲南省紅河ハニ族イ族自治州内に広がる棚田群。紅河南岸の哀牢山中にあり、元陽県を中心に紅河県・緑春県・金平県など複数の県に及ぶ。総面積約54000万㎡で、最大標高1800m、最大勾配75度の斜面にまで築かれている。この地に移住してきたハニ族の人々が8世紀頃から営々とつくり広げてきた。

世界一の棚田を1300年かけて築き上げたのは、少数民族・ハニ族の人々である。彼らは気の遠くなるような労力で山肌を耕し、独自の灌漑技術と農法を磨いてきた。森や霧など自然を巧みに利用した棚田は、一つの巨大な循環システムでもある。ハニ族が稲作を始め棚田を築いたように紹介したが、水稲耕作は水の確保と収穫時の水はけを両立しないといけないため最初は棚田方式から始まったと考えられるからである。

九寨溝　きゅうさいこう

【世界遺産委員会の評価】　（1992年12月14日世界遺産に登録された）

九寨溝は四川省北部に位置し、720㎢以上にわたって連綿と連なっている。、狭くて長い曲折の九寨溝の標高は4800mにもなり、そこで形態が異る生態システムが形成された。溝の中で140種類以上の鳥や多くの絶滅に瀕する動植物の種が生息しており、その中にはパンダ、四川のターキンなども含まれている。

四川省阿壩チベット族チャン族自治区九寨溝溝内には扎如、荷葉、樹正など9つのチベット族の村があることからその名がついた。観光地区の面積は62㎢あり、中国唯一の高山湖群、滝群とカルシウム灘流を主とする自然保護区である。九寨溝の景色は色とりどりで美しく、独特かつ非常に不思議なことから、「童話の世界」の美称がある。

九寨溝は三溝、百十八海を代表にして、五灘、十二滝、十流、数十泉などの水景を主な景観とし、九溝十二峰が組み合わさって高山河谷の自然景観を構成している。樹正、諾日郎、剣岩、長海、扎如、天海の六大観光地区を含め、境界内に高峰、彩林、翠海、畳滝とチベットの風情をあわせ九寨溝の「五絶」と称される。

九寨溝の最も良い景色は水である。滝の高低はまちまちであり、重なり合って、湖の大きさは一様ではなく、青緑に清く澄んで、水の中で影が逆さに映っている。紅葉、緑の木、雪の峰、青空、一歩は一色、進むごとに風景も変わり、激しい変化は尽きることがない。水は木の間で流れて、木は水の中で成長し、美しさのあまり「九寨溝から帰ると他の景色を見たくなくなる」と言われるほどである。

それ以外に、九寨溝の内ではパンダ、キンシコウなど多くの貴重な動物が生息している。また、民俗風情と風習も独特で魅力に富んでいる。

■アクセス

九寨溝から 88km 離れた九黄空港は、中国の主要都市と国内線で結ばれている。九黄空港からエアポートバスで約 120 分、黄龍経由で九寨溝に行くことができる。

黄龍　こうりゅう

【世界遺産委員会の評価】　（1992年12月14日世界遺産に登録された）

黄龍の風景名勝は四川省西北部に位置し、多くの雪峰と中国の最東部の氷河によって構成された谷である。ここで人々は高山の景観と異なるさまざまな森林生態システムや、壮観な石灰岩の構造、滝と温泉を探し当てることができる。この地区はまた、絶滅に瀕する多くの動物が生存しており、その中にはパンダと金絲猴（キンシコウ）も含まれている。

四川省阿壩チベット族チャン族自治区州松藩県の境界内に位置して、その景観が一本の金色の巨大な龍のようであるため、その名がついた。総面積は700余㎢で、彩池、雪山、渓谷、森林という「四絶」は世界に知られていて、中国で唯一、非常に良い状態で保護された高原湿地となっている。

主な観光地区の黄龍溝は岷山の主峰である雪宝頂の一番下に位置して、長さは3500mで、観光地区には3400余りの石灰華彩池が至る所にあり、世界でも規模が最大級で、保存が最も完璧で、造型が最も珍しいカルストの景観である。彩池は池底の沈殿物の色が異なっていることにより出現したもので、池畔の植物の色も異なっているため、日光に照らされると、もとの紺碧の湖面は色とりどりに美しく変わる。有名な五彩池の標高は3900mで、面積は2.1万㎡、693個の彩池からなっている。

ここでは8万㎡余りの金色石灰華の灘流が、密林の中を静かに流れている。最も有名な金沙浜の全長は2500mで、幅は30m～1170m。きらきらと透明な渓水は黄金色の石灰華岩の上から流れて、最も美しく多彩な豊富な石灰華層の景観である。

それ以外に、黄龍はまた多くのカルスト滝と鍾乳洞が至る所にあり、その内には、世界最大の石灰華洞窟――洗身洞もある。

黄龍の動物、植物も極めて豊富で、1500余種類の原生植物があり、風景区内にパンダ、キンシコウなどの国家一級保護動物が生存している。

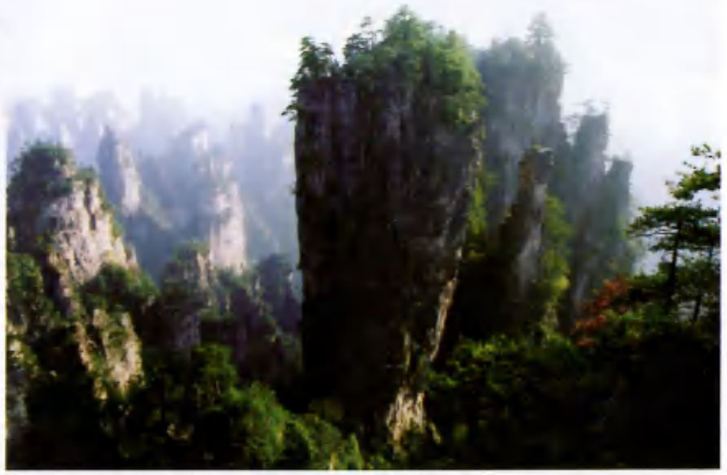
■アクセス

黄龍から54km離れた九黄空港は、中国の主要都市と国内線で結ばれている。九黄空港からエアポートバスで黄龍に行くことができる。

武陵源　ぶりょうげん

【世界遺産委員会の評価】　(1992年12月14日世界遺産に登録された)

武陵源の景色は美しく壮観で、中国中部の湖南省の境界内に位置し、連綿と続く260km²の観光地区内にある。最も独特な景観は3000数本の細く尖った砂岩柱と砂岩峰で、それらの大部分は200mほどの高さがある。山の峰と峰の間には渓谷が縦横に続き、渓流、池と滝などが随所に見られ、観光地区内には40余り石穴と2基の天然形成の巨大な石橋もある。人を魅了する自然景観



湖南省西北部に位置する。総面積は369 km²、張家界市の張家界国家森林公園、慈利県の索溪峪自然保護区、桑植県の天子山の自然保護区と楊家界の景勝地を含む。「奇峰、奥深い谷、秀水、深い林、鍾乳洞」の五言絶句で世に名を知られ、国家5A級の観光地。

地殻変動によって生まれた3000本以上の石柱がそそり立つ張家界国家森林公園は、最も早く森林公園に指定された地域である。開発も3つの区域の中で一番進んでおり、標高1200mの黄石寨(こうせきさい)山頂へもロープウェイが整備されているので、気軽に観光を楽しむ事ができる。また、天子山自然保護区にある350mの高さで2つの峰をつなぐ天然の石橋「天下第一橋」のある袁家界(えんかかい)には、高さ326mの屋外エレベーターも設置されている。

武陵源の鍾乳洞は数が多く、規模が大きく、有名な黄竜洞穴の底の総面積は10万km²、全長は7.5km、垂直の高度は140m、規模の大きさ、鍾乳石の数、形の珍しさは国内外の鍾乳洞の中でも特筆される。

■アクセス

張家界市から5km離れた張家界空港は、中国の主要都市と国内線で結ばれている。張家界空港からエアポートバスで武陵源に行くことができる。また、張家界市内のバスターミナルから、武陵源行きのバスも出ている。

三江併流　さんこうへいりゅう

【世界遺産委員会の評価】　(2003年7月2日世界遺産に登録された)

三江併流の自然景観は雲南省西北部の高山と険しい峰の中に位置し、八つの区域を含め、面積は17000km²。長江(金沙江)、メコン川(瀾滄江)とサルウィン川(怒江)の三本の大河の上流部はこの地区内を並行して勢いよく流れ、北から南へ深さ3000m余の渓谷と標高6000m余の氷山の雪峰を経由する。ここは中国の生物の多様性が最も豊かな地区で、同時に世界の温帯生物の多様性も最も豊かな地区である。

雲南境界内の金沙江、瀾滄江と怒江の三本の大河は「水が並行に流れているのに、合流することのない」というユニークな自然地理の景観のことである。雲南麗江地区、迪慶チベット族自治州、怒江リス族自治州行政区に分布して、高黎貢山、白茫一梅里雪山、哈巴雪山、千湖山、紅山、雲嶺、老君山、老窩山という8つの中心観光地区を含め、総面積は1.7万km²、雲南省で面積が最大で、景観が最も豊富かつ壮観で、民族風情が最も多彩で人々が最も憧れる地区となっている。

高黎貢山は地区内で最大の保護区で、主要な特色としては数多くの渓谷群、断崖奇石、谷川、滝と湖、原始の常緑広葉林、多種の民族風情などがある。そのうち、石月亮の観光地区は怒江流域の高山カルスト鍾乳洞景観の典型である。

白茫一梅里雪山区の景観は雲南最高の雪山で「神山」と呼ばれる梅里雪山、低緯度の近代的な海洋性氷河、瀾滄江の乾熱河谷、金沙江渓谷の地形が主な特色で、チベット族の宗教文化の雰囲気と民族風情が濃厚である。

哈巴雪山は迪慶州シャングリラ県に位置し、緯度が最も南の近代的な海洋性氷河、杜鵑雲海、高山の湖、氷山の峰、雪の峰、玉帯白雲、溶岩の奇観を主要な特色としている。

千湖山は金沙江流域の原始植生、高山氷喰湖の集中的な展示区の一つで、高原の湖、高山の草原、杜鵑林、杉林が一番の特徴である。

紅山区の景観は渓谷、高山砂漠、高山氷の河原湖、高山の草原、渓流の滝、原始林を主要な特色にしている。

雲嶺区は雲南のキンシコウを代表とする野生生動物の生息地である。

老君山区は主に高原氷蝕湖群、高山ホトトギスの林、氷河を解け、結氷する地形、高山草原の牧場、高山の赤色夕焼け地形などが典型的な景観である。

老窩山区の景観は高山湖、高山草原、野生の花卉を主要な特色としている。

「三江併流」地区は世界で最も豊富な地質と地形の博物館であり、そこに118の標高5000m以上の雪山、万年氷河、数多く広く分布している氷蝕湖、状態が最も整っている丹霞の地形がある。それだけではなく、生態景観の種類、生物の多様性が世界で最も豊かな地区の一つでもある。その上、他民族、異なる文化および信仰が調和され、共存している地区でもある。

■アクセス

三江併流は昆明市の北西に約450km、麗江から三江併流までは180km。周りの空港は麗江、保山、シャングリラ空港が利用できるが、目的地によって選択する必要がある。

四川省のパンダ生息地　しせんしょうのぱんだせいそくち

【世界遺産委員会の評価】　（2006年7月12日世界遺産に登録された）

四川パンダ生息地に世界中の30%以上のパンダが生存している。生息地はチョンライ山系と挾金山山脈の間で、9245km²を占め、7つの自然保護区と9つの風景区がある。この生息地は、世界最大の隣接しているパンダの生息地である。第三紀元始熱帯森林の遺跡に属し、飼育されるパンダの最も重要な繁殖基地でもある。そのほか、ここでは世界の絶滅危惧動物もたくさん生息している。

中国四川省内に位置し、総面積は9245k㎡。環境が最も整っているパンダの生息地で、30%以上のジャイアントパンダはここで生息している。

四川のジャイアントパンダ生息地は7ヵ所の自然保護区と9ヵ所の風景名称区から構成され、成都市が所轄する都江堰市・崇州市・邛崍市・大邑県、雅安市が所轄する芦山県・天全県・宝興県、アバ・チベット族チャン族自治州が所轄する汶川県・小金県・理県、カンゼ・チベット族自治州が所轄する康定県といった12の県及び県級市に跨る。

自然保護区（7ヵ所）

臥龍自然保護区はジャイアントパンダ及び森林生態系を主に保護。蜂桶寨自然保護区はジャイアントパンダ及び森林生態系を主に保護。四姑娘山自然保護区は野生動物及び森林生態系を主に保護。喇叭河自然保護区はジャイアントパンダ及びヌーなどの希少動物を主に保護。黒水河自然保護区ジャイアントパンダ及び森林生態系を主に保護。金湯―孔玉自然保護区は希少動物及び生態環境を主に保護。草坡自然保護区はジャイアントパンダと生態環境を主に保護。

風景名勝区（9ヵ所）

青城山、都江堰風景名勝区、天台山風景名勝区、四姑娘山風景名勝区、西嶺雪山風景名勝区、鶏冠山、九龍溝風景名勝区、夾金山風景名勝区、米亜羅風景名勝区、霊鷲山、大雪峰風景名勝区、二郎山風景名勝区となっている。

四川省のジャイアントパンダ生息地はジャイアントパンダに加えて、レッサーパンダ、ユキヒョウおよびウンピョウのような他の絶滅危惧種の重要な保護地域でもある。生息地の森林には植物学的に非常に豊かな生態系が保持されており、5000 ～ 6000種の植物相の故地とされている。また、第三紀の熱帯雨林に相似していることが注目されている。

■アクセス

四川省成都市のパンダ繁殖研究所基地へパンダを見に行くなら、市内の9番、15番、303番の路線バスに乗って行くことができる。

中国南方カルスト　ちゅうごくなんぽうかるすと

【世界遺産委員会の評価】　（2007年6月27日世界遺産に登録された）

中国の南方カルスト地形は独特な特徴を持ち、比類のない景観の多様性がある。この遺産は最もカルスト地形として典型的な特徴を持つ地区を選び、それを保護しながら、観光客に不思議なカルスト地形の独特な素晴らしさを提示しており、高い研究性と観賞価値を持っている。

「中国の南方カルスト」は一つの大きな地区であり、独特で多様なカルスト地形を持っている。中に雲南省の石林などを代表とする高原地区の石林や、貴州省の荔波を代表とする高原と低地から移行された地帯の峰叢カルスト、重慶市の武隆を代表とする長江北部の深い渓谷のカルストもある。

雲南石林イ族自治県の境界内に位置するカルストは「雄、奇、険、秀、幽、奥、曠」で有名。世界で最も珍しいカルスト地形の景観を持っており、「天下第一の奇観」と称賛される。また歴史が古いため、いろいろなタイプがそろっており、規模が広く、発育が整っており、「造型地形の天然博物館」と称される。生き生きとした石林、形態は珍しく、あるものは剣のように青空を指し、あるものはキノコのようで、あるものは天を衝く高塔のようである。あるものはくぼ地の間で隠れ、盆地の中に広く分布し、あるものは山の斜面や広々とした野原にそびえ立っている。

貴州省東南部に位置する荔波県のカルスト地形は、面積が県の20%を占めており、世界最大面積のカルスト原始林である。境界内の最も人目を引く景観は円錐状峰であり、最も典型的なカルストのタイプは峰叢カルストと峰林カルストである。ここで生活している人々は90%が少数民族で、水族の水書、ブイ族の古法製紙などは今も伝承され、人々を驚嘆させ、珍しい自然の景観に多くの民俗風情を添えている。

南方カルストの重慶武隆は3つの独立するカルスト系統が育成され、「天下第一の洞窟」と称された芙蓉洞、アジア最大の天生橋群、全世界でも稀有なカルストタイプの後坪天坑などがある。

■アクセス

昆明市から石林カルスト地区までは70km、直行バスで行くことができる。

貴州省東南部に位置する荔波県のカルスト地区は、貴陽市の路線バスで行くことができる。

重慶市の路線バスに乗って武隆カルスト地区に行くことができる。

三清山　さんせいざん

【世界遺産委員会の評価】　（2008年7月8日世界遺産に登録された）
三清山は独特な花崗岩の造型石と多種の植生、また遠近変化の景観および人の心を揺り動かす気候の奇観を互いに結合して特別な景観美効果を創造し、人々を魅了している。

江西省上饒市玉山、徳興の二つ県に位置し、観光地区の総面積は約756km²、山に三つの峰（玉京、玉華、玉虚）があり、三清（道教の玉清、上清、太清）の名声を得た。そのうち、玉京峰は三清山の主峰であり、標高は1819m。三清山の中で最も高く、一番中心にあり、落差が最大の観光地区である。玉京峰の日の出は三清山の一大奇観になっている。

三清山は南北に狭く長く、異なった成因の花崗岩は地形が密集して分布し、世界で知られた花崗岩地形の中で最も分布が密集し、その形態が多様な峰を見せている。観光地区に2373種類の高等植物、1728種類の野生動物があり、東アジアで最も多様な生物環境となっている。境界内に不思議な峰と奥深い谷の千仞が多数あり、長期的な地形の変化によって、その独自の特色を持った奇怪な峰や石、急流の飛瀑、渓谷の幽雲などで雄大な景観を形成している。自然な地形に従って、三清山は東険、西奇、北秀、南絶と称されている。南清園、万寿園、玉京峰、三清宮、西華台などの九大観光地区のほか、巨蟒出山、玉女開懐、神竜劇松などの十大絶景がある。

■アクセス
玉山駅から路線バスで三清山に行くことができる。

三清山は歴代道家の修行場所であり、「露天の道教博物館」と称され、そのうち八卦によって配置された三清宮と古建築群は1600数年の歴史を有し、観、殿、府、坊、泉、池、橋、墓、台、塔などの230多くの古建築の集積地となっている。

中国丹霞　ちゅうごくたんか

（2010年8月1日世界遺産に登録された）
赤い砂礫岩の集中したな地球の進化のプロセスを示すカルスト状地形を、丹霞（たんか）地形と呼ぶが、代表的な6つの地域（広東省丹霞山、福建省の泰寧、江西省龍虎山、湖南省の莨山、浙江省江郎山、貴州省赤水）が、「中国丹霞」として2010年に世界自然遺産に登録された。

広東省丹霞山は広東省韶関市の仁化県と曲江県が接する地区にあり、面積は290km²。主峰である巴寨の海抜は618m。丹霞盆地の南西の果てには著名なネアンデルタール人の頭骨の化石の遺跡が発見され、早期のホモサピエンスを研究するうえで重要な糸口となっている。獅子岩にある石峡文化遺跡は6000年前の新石器時代後期の古人類文化遺物である。

丹霞地形の中で最大規模を誇る福建省泰寧の丹霞地形。高さ100mを超す垂直に切り立った絶壁、無数の穴を持つ不思議な岩肌の巨岩、動物の形に似たユニークな奇岩の数々、平地が少なく切り立った泰寧丹霞の岩山は、「中国丹霞」の中で典型的な特徴を持っている。

江西省龍虎山は江西省鷹潭市の南16kmに位置し、総面積は380km²、龍虎山は丹霞地形の標本のような奇峰が連なっている。また、龍虎山の仙水岩の断崖絶壁には無数の懸墓遺跡があり、棺の数は100を超え、すべて象眼細工がほどこされて絶壁に納められており、懸棺群全体をみると、まるで巨大な絵巻物のようにみえ非常に神秘的である。

浙江省江郎山は江山城の南 25km の江郎郷に位置し、岩、穴、雲、滝が一つの山に集まって、壮観である。山頂に切り立った三つの大きな石があり、高さが 369.1m あり、その外見は石筍に似て、北から南へ「川」という文字のように見える。「郎峰」、「亜峰」、「霊峰」の順番で、「三爿石」と言われる。山々は広々としていて、雲霧がいつも立ち込めているため、空と山は一体となり、景色が素晴しい。

湖南省莨山は湖南省西南部の新寧県内にあり、総面積は約108km²である、莨山の丹霞地形は多種多様で、高さ、険しさ、深さ、長さ、狭さが一体的に揃っている。特にたくさん螺の形をした峰は、まるでクジラが群れているように見え、非常に壮観である。また、銀杉、珙桐、華南虎、ウンピョウ(雲豹)、ジャコウネコ（霊猫）など絶滅危機に瀕している動植物が生息している。

貴州省赤水は貴州省貴陽市から450km、四川省成都市から340km、重慶市からは270km。赤水地区は十丈洞、四洞溝、丙安をはじめ、7つに地区分されている。豊富な水資源と変化に富んだ地形が滝群を形成し、高さ3m以上のものが実に数千ヶ所もあり、広い面積に古い植生と2359種の動植物や大切な絶滅危惧動物を有していることが赤水丹霞の最も独特な特徴となっている。貴州省赤水は「緑の丹霞」とも呼ばれている。

澄江の化石出土地域 ちょうこうのかせきしゅつどちいき

【世界遺産委員会の評価】 （澄江の化石出土地域は2012年世界自然遺産に登録された）

澄江化石の群は遠古期複雑な海洋生態システムの形成を記録し、澄江遺跡は少なくとも160種類の生物化石を保存している。様々な神秘的種群およびその他の196個の物種は、5.3億年前の地球生物大爆発を証明し――今の地球上の主な動物の群が全てこの時期に現われているという説の古生物学の研究の重要な手掛かりとなっている。

「澄江の化石出土地域」は雲南省玉溪市澄江県の帽天山周辺地区に位置し、敷地の512万㎡の中に最も完全な早期海洋の古い生物化石の群を現在保存し、そして、部門広範な無脊椎と脊椎生命体の硬軟組織の解剖構造を展示している。又、ロッキー山系のカナダ側バージェス頁岩よりも古い時期である上に、196種も見付かっている澄江の化石の中で、バージェスと重複するのは6種しかない、最古の脊椎動物であるミロクンミンギアをはじめ、保存された種の多様性の点から、澄江もバージェス頁岩と同等の重要性は認められるものと判断し、2012年世界文化遺産に登録された。

カンブリア紀は膨大なリンの鉱床が形成された時期でもあり、どのような関連性かは解明されていないが、当時の進化とリン酸塩には何らかの関連性があると考えられている。澄江の化石出土地域周辺もリン鉱石を産出し、かつてはその採掘が行われていた。しかし、2008年までに、世界遺産登録範囲周辺の緩衝地域では、かつて行われていた14箇所でのリン採掘はすべて停止された。関連地域は公有地となっており、中国の国内法で保護されているほか、帽天山周辺の地区は雲南省澄江国家地質公園という名称でジオパークにもなっている。

■アクセス
澄江県は雲南省の省都である昆明の東南、昆明国際空港からは直線距離で約50キロほど、澄江の化石出土地域はその澄江県の東の端である。

新疆天山 しんきょうてんざん

【世界遺産委員会の評価】 （新疆天山は2013年6月21日世界自然遺産に登録された）

新疆天山は景観と生物生態進化の経過の完全性を持っており、世界自然の遺産の保護と管理要求とが一致している。

天山山脈はユーラシア大陸の内陸部に位置し、中国の新疆ハミ星星峡ゴビ砂漠から、ウズベキスタンのキジルクム砂漠まで、約2500kmもの幅で横たわっており、新疆境内は1760kmを占める、世界唯一の巨大な砂漠に挟まれた山脈である。また、多数の氷河、素晴らしい自然の風景、動植物の多様性等の自然特徴は、最も代表的な温帯乾燥山岳生態系からなる。

新疆天山の東から1/3程の場所に天池と呼ばれる湖がある、天池は標高1980mほどの高地にあり、冬は氷点下30度以下まで気温が下がり、天池から天山山脈の東部にあるボゴタ峰(標高5445m)を臨むことができる景勝地である。雪を抱く連峰とその姿を映す湖で知られるスイスの景観に似ているので「中国のスイス」と呼ばれ、日本の上高地の風景にも似ている。

■アクセス
新疆ウイグル自治区の区都ウルムチ（烏魯木斉）市から100kmほど離れたところの天山山脈にある景勝地「天池」である。又、天山山脈の東側のハミ地区だけで、北海道の1.5倍もある。

泰山 たいざん

【世界遺産委員会の評価】 （1987年12月11日世界遺産に登録された）

荘厳かつ神聖な泰山は二千年にわたり、帝王が拝謁する対象であり、その山中の人文傑作と自然景観は完璧に調和され、融合している。泰山は中国の芸術家と学者の精神の源流で、古代中国文明と信仰のシンボルである。

山東省中部に位置し、総面積は426km²、国家5A級の観光地。観光地区は標高1545mの主峰の玉皇頂を中心に、放射状の分布を呈しており、五岳（泰山、嵩山、華山、恒山、衡山）の長といわれる名山。

泰山には六大観光地区に分かれ、有名な石窟は72ヵ所、滝は64ヵ所、泉は72ヵ所、古木、名木は1万株以上、古遺跡は42ヵ所、古墳は13ヵ所、古建築は58ヵ所、碑碣は1239ヵ所、石刻は1277ヵ所、近現代文化財は12ヵ所、文化財の秘蔵品は1万余件。泰山の日の出、雲海、玉の月、夕霞夕焼け、黄河金帯を含む十大自然奇観と、石塢松濤、対松絶奇、桃園精舎、霊岩景勝など十大自然景観がある。

泰山の人文の歴史は悠久で、文化遺産は豊富である。秦の始皇帝や前漢の武帝らが天地を祀る儀式「封禅」を執り行なったことでも知られ、今も多くの登山者と参拝者でにぎわっている。山頂にある玉皇廟（ぎょっこうびょう）まではおよそ7000段の階段が続いている。途中1633段の石段が続く難所・十八盤（じゅうはちばん）を越え、南天門をくぐると、そこから約20分程で頂上の玉皇頂（ぎょくこうちょう）に到着。徒歩だと4～5時間かかるといわれているが、現在はロープウェイでの観光が可能となっている。山頂近くにはホテルもあるので、一泊してご来光を拝むこともできる。

また、麓にある岱廟（たいびょう）の天貺殿（てんきょうでん）は故宮の太和殿（たいわでん）、曲阜（きょくふ）孔廟の大成殿（たいせいでん）とともに中国三大宮殿建築と称される。

■アクセス
泰山の玄関口泰安市は北京の南方約500kmに位置し、済南空港からバスで泰安に行くことができる。

黄山　こうざん

【世界遺産委員会の評価】　（1990年12月12日世界遺産に登録された）

黄山は中国の歴史上、文学芸術の最盛期に（16世紀中期の「山水」風格）かつての広範な称賛を受けて、「震旦国中の第一奇山」との名声を得た。今日、黄山はその壮麗な景色――花崗岩石上で生長した奇松と、雲海に浮かぶ珍しい石が有名である。全国各地からこの景勝地を訪れる観光客、詩人、画家、撮影家にとって、黄山は永久不変の魅力を持っている。

安徽省（あんきしょう）南部の黄山市に位置する、中国最上級の観光地区で、奇松、奇石、雲海、温泉の4つの景観が複合して独特の景観をつくっている。地殻変動と浸食から産出された、72にのぼる峰のうち、三大主峰といわれる天都峰、蓮花峰、光明頂は1800mを超え、そのうち最高峰の蓮花峰は1860mの高さを誇る。多くの峰々が折り重なる風景は、水墨画の世界を思わせ、長い年月をかけてこのような風景を造りだした自然の神秘を実感することができる。そして古来より「黄山から帰ったら岳を見ない」という諺がある。黄山風景区の面積は154km²あり、温泉、雲谷、松谷、北海、王屏、釣橋の六大観光地区を主としている。

温泉地区の主要な名所は攬勝橋、翼然亭、温泉、白竜泉、鳴弦泉、三畳泉、慈光閣、人字滝、百丈泉、氷河遺跡、酔石、丹井などがある。

雲谷地区は黄山東部に位置しており、地形は比較的低く開けた谷にあり、林景で名高い。主要な名所には雲谷山荘、古木、怪石、「九龍の滝」などがある。

松谷観光地区は黄山の北斜面に位置しており、池潭でその名を知られている。主要な名所は芙蓉峰、翡翠池、五龍潭などがある。

北海地区は黄山中部に位置しており、標高1600mぐらいの広い高山で、峰、石、松、雲などの奇観が集まって、黄山の景色の窓と称されている。

玉屏地区は黄山の中心観光地区で、玉屏楼を中心にして、蓮花、天都の二つの大きな主峰を含んでいる。

釣橋地区は黄山西部に位置する。釣橋庵の元の名前は白雲庵、明朝(1368～1644年)は1つの道教の寺院で、清朝の康熙年間(1662～1722年)に改築して庵になった。谷は非常に深く、また松の美しさと泉の素晴らしさでも知られている。

■アクセス

黄山市屯溪から5km離れた黄山空港は、中国の主要都市と国内線で結ばれている。黄山市屯溪から登山ロープーウェイ乗り場までバスで行くことができる。

峨眉山と楽山大仏　がびさんとらくさんだいぶつ

【世界遺産委員会の評価】　（1996年12月6日世界遺産に登録された）

西暦1世紀、四川省峨眉山の美しい山頂で、中国の第一の仏教寺院が落成され、次第に仏教の主要な聖地のひとつになっていった。長い世紀を経て、文化財は大量に蓄積し、その中で最も有名なのが楽山の大仏である。それは8世紀、人々が山の岩を掘って作ったもので、まるで三江の交わりを高所から見下ろしているようである。仏像の全長は71m、世界の極みと称される。峨眉山は、また種類の豊富な植物で天下に名声を知られ、亜熱帯の植物から亜高山の針葉樹林まで、何でもそろっており、一部の木の樹齢はすでに千年を超えている。

峨眉山は四川省成都市から南に約120kmに位置し、面積は154km²。「二つ山が向かい合っており、形は美しい峨眉のよう」から名声を得て、古来より「峨眉天下秀」ともいわれ、「植物の王国」、「地質博物館」とも称賛されている。山の上に5000種類以上の植物が生息し、その中で高等植物は3200種類以上で、ヨーロッパの植物の総計に相当する。峨眉山は標高3099mの山で、中国仏教四大名山の一つ。報国寺（ほうこくじ）、万年寺（ばんねんじ）など26の寺が立ち、中でも万年寺は東晋時代の古刹で、980年に鋳造された普賢菩薩像が安置されている。観光で行く場合は標高3077mの金頂（きんちょう）が最も高い場所である。金頂では天候などの条件が揃えば、雲海に映った人の影の周りに光の輪ができる仏光と呼ばれる現象が見られることがある。なお、金頂へはバスやロープウェイを使えば日帰りで行くことも可能である。

楽山大仏（らくざんだいぶつ）は峨眉山から約40 km離れた岷江（びんこう）と大渡河（だいとが）の合流地付近にある。大仏は河の氾濫や水難事故を鎮める目的で建造されたもので、713年の着工から約90年の歳月をかけて完成した。高さは約71mあり、世界で最も高い石刻大仏といわれている。

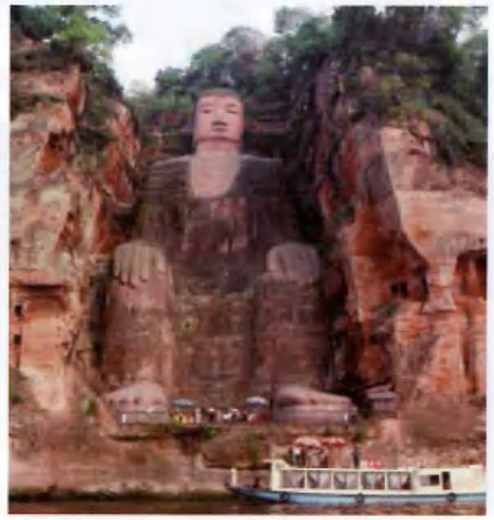
■アクセス

成都から峨眉山へは約170km、成都新南門、高省橋、西門などのバスターミナルに30分に一便峨眉山バスターミナルに着く路線バスがある。そこで、峨眉山バスターミナルから乗りかえて報国寺(峨眉山の入口)に行く事ができる。報国寺で登山用のロープウェイに乗る事ができる。

列車の成昆線の峨眉山駅は、報国寺(峨眉山の入口)にまでわずか10km。

峨眉山と楽山大仏の間は3番、7番、8番、13番の路線バスがある。

フェリーボートで楽山大仏の観光地区に行くことができる。



武夷山 ぶいさん

【世界遺産委員会の評価】 (1999年12月1日世界遺産に登録された)

武夷山脈は中国東南部で最も有名な生物の保護区であり、古代から生き残ったたくさんの植物の保護区でもある。そのうちの多くの生物は中国特有のものとなっている。九曲渓の両岸の峡谷は美しく、寺と廟が多い、そして高い考古の価値を備えている。

福建省西北部に位置し、全世界の生物の多様性保護にとって重要な地区である。中国における最も典型的な丹霞の地形を備えており、総面積999.75 km²、「碧水の丹山」、「東南の美しい奇界」と称され、中国最上級の観光地区である。

武夷山は36の峰からなる山で、その間を全長60kmの九曲渓(きゅうきょくけい)が山を縫うように走っている。山頂の天游峰に登ると、九曲渓を一望でき、そこからの眺めはまさに絶景である。また、九曲渓では、竹をつないだいかだに乗って、ゆっくりと武夷山の景色を楽しめる渓流下りもできる。

武夷山は豊かな歴史文化遺物を有する。観光地区内にある漢(紀元前206－220年)閩越王城遺跡は、48万㎡を占め、中国長江以南で最もととのった漢代の古城遺跡である。それ以外にも、中国宋代の儒学者、朱熹(しゅき)は武夷山で50数年間勉強し、著述を行い、弟子を育って、朱子理学はここから次第に広がりはじめ、正統的な哲学思想になった。朱熹が儒教を初めて体系化した功績は大きく、タイム誌の「2000年の偉人」では数少ない東洋の偉人の一人として評価されている。

■アクセス

武夷山市から南6km離れた武夷山空港は、中国の主要都市と国内線で結ばれている。武夷山空港からバスで10分程度武夷山に行くことができる。

無形文化遺産 むけいぶんかいさん Intangible Cultural Heritage

無形文化遺産(むけいぶんかいさん、Intangible Cultural Heritage)は、民族文化財、フォークロア、口承伝統などの無形の文化遺産のことを指す。世界遺産条約は発足の経緯などから有形文化遺産のみを対象としたが、後は地域ごとに多様な形態で存在する文化を包括的に保護するためには、無形の文化遺産を保護することも認識されるようになり、2003年のユネスコ総会で無形文化遺産保護条約が採択された。2011年現在では世界遺産と(世界)無形文化遺産は別個のものであり、事務局も別である(前者はユネスコ世界遺産センター、後者はユネスコ文化局無形遺産課)。ただし、ユネスコは将来的に統一する見通しを示している。

昆曲(こんきょく)とは中国の古典的な舞台演劇である戯曲の一である。元朝(げんちょう)末(1368年)、昆山(こんざん)(現・江蘇省蘇州市東部)一帯で流行した戯文(ぎぶん)調を「演劇の祖」昆曲の創始者の顧堅らが整理した昆山腔(こんざんこう)があったがそれを明の嘉靖年間(1522－1566年)、魏良輔(ぎりょうほ)がさらに弋陽や海塩などの民間の曲調を取り入れることで作られた。明の万暦(1620年)以降、徐々に各地に広がり、各地で昆曲系統の地方劇が作られ、また川劇(四川地方劇)や婺劇(浙江地方劇)といった地方劇の曲調として使われた。無形文化遺産保護条約の発効以前の2001年に、ユネスコによって「人類の口承及び無形遺産の傑作」の宣言を受けており、世界無形遺産に登録されることが事実上確定していたが、2009年9月の初の登録で正式に登録された。

古琴(こきん)は、3000年の歴史がある中国の伝統撥弦楽器。長さ約130cm、横約20cm、厚さ約5cm。通常、上面材は桐、底面材は梓で、一体となって共鳴の役割を果たし、表面には7本の弦が張ってあり、左手の側から13個の徽をはめ込んで、弦の音が分かるような仕組みになっている。琴面上端の岳山、また琴底の上端から下端にかけては軫池(糸巻き)、龍池(第一共鳴孔)、鳳沼(第二共鳴孔)など、各部位には文化的な雅名が付されている。そして右手で弦を弾き音を鳴らす。演奏には、散、泛、按に分類される3種類の音色があり、左手だけでも吟、猱(nao)、綽、注などの非常に豊かなレパートリーを持っており、約3000の題解(琴の音楽の説明)と600曲の楽譜が現存している。代表的な曲は、「高山流水」、「瀟湘水雲」、「陽春白雪」、「大胡笳」などがある。長い歴史と多くの積み重ねを経てきた古琴演奏技は、2003年、ユネスコの無形文化遺産保護条約に基づく「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に掲載され、2009年9月に無形文化遺産として正式登録された。

ムカムは新疆のウイグル族の大曲芸術、大型の楽曲を意味し、歌と踊り、そして民俗的古典的な音楽が一体となった総合芸術で、2005年11月25日、「新疆のウイグル族の大曲(ムカム)芸術」として、ユネスコの「人類の口承及び無形遺産の傑作」に登録されている。500年来、十二ムカムの楽曲は柔軟さを持ち、都市、農村部を問わず歌われ、絶えることなく歌い継がれて、民族のほとばしる情熱を今に伝えてきた。

中国国家観光局大阪駐在事務所
TEL:06-6635-3280　FAX:06-6635-3281
〒556-0017　大阪市浪速区湊町1-4-1　OCATビル4F
http://www.cnta-osaka.jp

ご覧いただきありがとうございます！